823
M8N2

岷江入楚

花宴

5

Freer Gallery of Art
Washington, D.C.

若紫

十七歳　　十月叙三兼中将

源氏君瘧病事

三月廿日為加持向北山聖坊事

北山之次源氏見其僧都之姉尼君隠居之事

御供人々物語国名所之次申出明石入道女有様事

小柴垣間見之次見十歳許女子御事　紫上是也尼公ハ紫上之祖母

僧都来告源氏君後事就姉尼公事

僧都奉請源氏我坊事

僧都語尼公并姫君有様事

同時源氏為西尼公之使見姫君事

明日北山聖奉加持奉贈物等事

座人奉独鈷僧都奉贈物等

源氏遣消息於尼公拜事

以中将左中弁以下参御迎事

僧都琴持参源氏弾給事

若紫

十七歳　十月叙三兼中将

源氏君瘧病事

三月廿日為加持向北山聖坊事

北山之次源氏見其僧都之姉尼君隠居之事

御供人々物語国名所之次申出明石入道女有様事

小柴垣間見之次見十歳許女子御事　紫上是也尼公ハ紫上ノ祖母

僧都来告源氏君渡事就姉尼公事

僧都奉請源氏我坊事

僧都語尼公并姫君有様事

同時源氏対面尼公之次乞姫君事

明日北山聖奉加持奉贈物等事

聖人奉独鈷僧都奉贈物等事

源氏遣消息於尼公許事

頭中将左中弁以下参御迎事

僧都琴持参源氏弾給事

源氏君帰京向寛上宿示事
又之日も書小山尼上伴事
二三日後又も惟光於小山相尋少納言乳母事
藤壺宮煩病退出行事
源氏構遣命婦密通事　藤壺之御懐妊事
あつきほとはいとゝおきもあかり給はす三月になり給へは
とあり是ハ六月のころ然ハ懐妊ハ四月よりの事なるへし
源氏見夢を人に尋之事　有占兆事
秋七月藤壺参内之事
九月比源氏也六条京極之次尋故按察大納言旧宅之事
紫姫君ハ祖母之里也
十月朱雀院行幸舞人以下沙汰事
小山尼上卒去事　或九月廿日下旬
源氏宿紫上京邸途少納言乳母行事
翌朝於帰路而後使随身敲妹之門事　此女不知誰人也
以惟光於京極家問姫君行事

源氏搔攬和琴歌常陸介事
源氏自出迎取紫姫君於二条院事
少納言乳母同乗西対着事
姫君手習之次書源氏画て給事

よしハ風をしたハりられぬへく　は寒頭ノ初　瘧痢

瘧　俗言　發心　瘧疾　二日ニ一度發ス

瘴瘧之寒熱まうる毎に風ひくを八日わつらふを云　日まぜを瘧日瘧と云

箋云　痎ハ古暴切　通作痁　瘧文病也　一云小児口生瘡　通作痁

箋　夕白巻ニ頭痛まて霊氣ありあひらひし気なり

よろ川小路をなまひらかなと　ましるひもて厭術をさせ

く乳事も有　杜子美ハ待れ手提髑髏血と云句を誦しても瘧落る

とうりかねハ真言等の陀羅尼のちかうなり

松　花鳥に杜子美待の手提血と云句を誦しても瘧ハ落るといふ

これハ句意のかハつ小例とする　是ハ杜子美ヵ花卿奇云子璋髑髏血

横糊手提擲還崔大夫と云句也

向ひなひハ厭術しムとまへあひまふつひく　此初ハさしたまへハ

俗語なるもとこもとききしはるとまうすうてを云てう發し向ひくり

てあるも如ハ一泓ハまうしちハひと云ハうろう日つてひと云ハ重き名

よみ間の額とほ名ともへあハゆからハさかりひしかハにひくふあきふきとや

箋　杜子美卿欽云　子璋髑髏血模糊　手提擲還崔大夫　李列副使殿

子璋反以兵攻東川節度李奐敗北於是成都節度崔光遠
率其牙将花敬定討之子璋既誅敬定恃功大掠肅宗聞之怒
由是不見推用公作花卿歌蓋痛之也　詩の心は首を斬て
いふかしりれまじと叩かれたりしと云し　手ニ提ゲ擲ニ還ス崔大夫ニ（ヒツサゲウチナゲシサイタイフニ）と云用
手ニ提擲ニ還崔大夫（ヒツサゲウチナゲシサイタイフニ）　心花卿此一詩不合し　此句古今虎の説ありしと云
又師説云ありし此句を以て虎とせしかは子美ありし杜子美か夢に
名花卿か歌は還句も虎と思ひ侍りしに今此虎は勢ひも句母
此句を以て虎を除くへし又句に夜深戦場寒月照白骨
此句もて形を除くと云
きこえける寺　箋 北山　旧 向南山ト万年日
旧 此寺称る寺 背四十九院とも 伝法成地なり
箋 河原院とありし 此院と云同社し 六波羅寺にさし渡や志賀の
山路のつゝら折り人あまりて行や志賀の山路につゝきて
つゝら折りは志賀寺と云説を解てし称るはつゝら折は
清水細谷杖本の子にてしるなり　称る寺ある　旧記　活部
大浦首原伊勢人桓武天皇御宇造東寺行事間所騎用馬於
鴨河原放失尋跡行登北山奉拝毘沙門天始建立此寺よし
箋 氷鏡云延暦十六年藤原伊勢人と云人貴船明神の教にて
仰りおこし　弄鈔にくり返しとある也よし
しこ此花をこゝろのひん　旨 系図の人のあへし
まことの貴も世あり　如 世ゝに流布せし箋
人ことわりとも　又云 此院の家族居給ふのつゝけよし
箋 上ノ詞よ其事にあるのと云は厭術の事もしいはゝ次ノ詞ハ世あれ人なり
前の事をは語人のまつり殿の事もしあいはゆるひの詞は煩手人
まうひの詞まて常にきゝんとすへし　秘葉ニ頃て
倒てえへぬしりたくひ　北山の木の陰のかわれして多く虎と号すとし
まゝりかつ清る　如 老いとひ行くも虎まて云ふして八番節
旧 為猶世依りしたまて云ふはつみとしつゝ此人々
さへとこゝろ付　北山の霜の海人ともに仮りられたる人の物
言ひ侍りて　旧 老居 秋葉日　箋 病融院恍居疾給之
時居天台座主慈恵僧正奏光病無術之由春秋三之後極之
参入奉加持即御平愈よし　花香融院病痛をいでたゝかはむ時

天台座主良源僧正となられし事ハ天元四年の秋のよし
小野宮右府記にもしるされたる人ハ良源僧正楼近記佛穂草
車并ニ執杖阿闍梨二人ニ于後ろ衣 紅大僧正とそ
むかしそし　　家のかし
庵のぬかりいりぬ　　如 無漏之義し　笑
三月の作てより　　是より鞍馬人の花ゆかし
山ざくらいまださ作りけて　　仙 風よりもと信入し自全の月も同し　定家の記
仙 里ハ（玉葉ニアリ）ちりみちりそそふしと是我山のさくらハまさ作りけり　　此二首にハ我もかへし
日ざまより（日本紀ニ）あかつき花をちりつてきし野ゝ山のさくらハまさ作りけり　和枝
昇 本ろと所及川わり佐さ此花しとして柳秋義おこ此昇と我せて　赤人
色 今の世ハまくら前の花ハ散れもちりそそ抜さらむるとと云
いつまでもくおもしろ
不まれ作り为かく　　秋 音気まくひたし
言尽の人をそまうかうり作ふあまうつそせうやかれの義
幸のさ雨も　　笑 秋作えうきゝむしよあやまれり
なき佐くかれかまて　　如 鶴る寺 前ハ四千九徳の金紀作盛徳し
　　仙 仏弟子須菩提仏西天石窟 笑

河古 いくりんへちかれわにもちてよは世のしれとのやのし二作りけん
呉苑云 陳思王遊魚山忽聞岩裏有誦経声清遠寥亮使解音
者写之為神仙之声道士効之作梵唄とそ
玄山詩云 余家有一庵々中無一物とそ
あわりしこや　　如 ひとつまの初しうらしけるりにし
そうひめし作りします　　作とひしつまのなしつましそ一
日石つりに集まりしをとやろし
きんうめあこうすひも　　仙 修方し山伏ハ修験者と云
　　宇吉 験ちんきくとそうハまるの本まうりてハなれし
是修験也
如 年先てハ扣世の引移かとハ和しも云能世の人つまうかとかもへ[illegible]
　　和云 此義ある但世のすをと云ふす人孫りと云まあさまう
大ところするるくわ　　太田し
きうへきうの　　河 首しそうせハのまれ色 世俗ニ歓入为と書れ[illegible]と云
　　笑 首し何ゝあんつうりてしまて
如 首なしとるかもし河内なニハきうへきらんとなるり　寿円

内心の不調なるに於ては外にしく加持して内心調る(べ)し
身ハ茶ノ湯の如し
すませ　如 食気吸て書の葉ともとらんあまたに加持
加持とまいらる　箋曰
箋 佛自散陵衆生之心水謂加衆生之心水得佛日謂持
私或人云衆生乃水清浄なる時仏日の光自然にうつるべし
僧坊(ソウボウ)とも
法師のすまひ　如 箋に此詞によって考へ侍るに所ハ僕まうる
所に、法の衆も花子などをきてちかくのものまのつらおもしろと
臧陵　九折　盤折　通数山顛　白氏文集　遊悟真寺　已上同箋載之
おかしく来なれと　寺 恭のまうるによりて居さはしくおもし
如 僧都の房のまうらひ侍る人きこゆべし
きよけなるやうなり
なかしの僧都　箋 第一の阿母の叔父尼公と見ゆし
法 花の従に見え僧都とか山の僧都と見えたり　仏箋を按せ
この二人等　如 箋にこと葉のもし本よみ見ゆ

かくうつりきん　法の詞し僧都とさしてのまかて
法師やけしけるにやあるへきもれ　如 箋に法の思ひて後
つたなる類に禅余りてかき出して僧都のやあたへきを仏をそなへ詞
箋を言さ所まさにおりてやあへ(まろいひ)かうや
まよけなるまうるハ　如 箋に尼公の方の女かなるへし
寺 僧都の妻なりとしとよし又尼公の方の女まうるハまりや
阿闍梨てまうる　閼伽とハ梵語に功徳を清浄する寘の時子
必ずしも汲のみし此時ふよみた功徳の生見るし　增書ハ井花水と云
花とそ　箋 此花として此花を好まるし
しこに女にて　箋 法の供養の人て見つ建て見えて
尼のまうりて尼こそ女まうりて見えて　も御供の人ときし 極女子とぞわかれん
おうそれあらくも
なりもまつとうらしく見てそしい所なり
あはこなれし　誦し　念誦なるのさるべし
月なるく所まうたに　如 虎ハ人ふ洞さるゝ所の東ハおそろしき
考への山よ人あらぬ　うの山なり

注 門前秋水後山緑日蕭条晩景閑　出居雅卿

秘 源氏立出てながめやりたまへるにいとゞ心ぼそきにつけて

ながめやるらむ人　秘 源氏の詞

これはいとあはれ　秘 さきの御人の詞也 因是は良清が詞とも

秘云 為くらべなさけなくても人まじれ

人なき国　注 良清是故の由はいはざるなり

伊勢の海人 人の国ゆへとて思ひかけ給へるやまさりなりと申

けむしはしらう　秘 箋 源氏の御事を思ひて

雨とのみや　箋 他国也

なかなかのいなけ　注 なかなかなければいひてさて宮なくひと

おもひては源氏の御心をかへりみて思ふとおもしろくなし

箋 花宮は海の浦なり 大宰府迦ちよ 秘 専子良の箋に

よ給ひてまゐらす

箋 良清が文の前播磨守也 同家の箋 東門也

秘云 又西国の人ともよりは良清が父は人まじれ　秘 時能来る良清が家

ちかき所にいたりて後ありて

不見しられ人ともなき良清が家也

又良清は播磨守の子也 秘云播磨のかみの名前を鉄にて

源氏もあはれのさまにおもかるべき時の序也

いとゞ明石の浦は　注 阿弥陀曲 隈

ゆかしさ　弄 おろかならんとひとつ字一線は消て書そふるまことに

我は何のまくらの上にもなく何の西の方にてまことに

御えの上のくらしの儀は同じくありさまなり

かの海の浦のよし　箋 秘に播磨守の同じ明石入道の事也

未だなり　注 新発意にて出家して秘門に入人の名也 又れ新発意は

須弥の新発意の菩薩と云ふてんし

箋 入道の事白砂の上にてこゝに入道のかはりにはりき

とは何ぞ 是ありて世の濁事といふ入道の新発意也

已上箋秘抄に書入

家をいと儀むり　箋 同じくこそかしこと云なり

秘 むかしの称をはなれて　里書箋同し

太政大臣後にて　箋 秘に近衛の後胤にて流浪の果なる理運の人也

明石の入道の事なり

いつくしう　　に 身のおもむきをもよほして出仕をもえせすなりけるし
世のひとりのみかく　　いつこともかなしくいふやうのものし
よろしからぬをもとて　　秘 かゝるかなしうてみかとにいつれきこえ
宮にも心ちなるへきにも御後見ともならて国守になりたまへる本願
立念のうちなりしこれは世の人のまたいひあへることいふ也
を思ひとまへとの給へりあやしうおほさるゝことあり又いひしなと
忠岑かうたにも小児わかおほくの中におも捨てもすゝめつゝ
箋云只温織よくのかたちよし　　秘云温織といふは文字直也
いふ事にて世の代々かはらぬ事也
に 近衛府将任受之例　　寛平実方朝臣長徳元年正月十三日
蒙左中将任陸奥守即時罷□　　此外例不可勘
秘 山陰中納言蒙中将任備前守下向之由見三代実録
箋云実方は祝流の同し門人なりこれは山陰中納言之例也　已上箋義注之
かくはかりなりも山をもて　　可異 日本紀 文選 奥ノ字をあつれ
とかきり　　蒙雲奥　　これも山とのくに
ゆつりかくいへりなのひかりいつくしき　　西月なれとて此家入なと

はやくやかて係き山なれはとて経てくまなく比侍ふのさかしいへと
またみのくまれか　　秘 海つらすかていまのへききにもあらて
秘云是より浦つかふ家庭しなくていとふ
ゆゝれ山里は　　御山なとの妻子なかくて況の後よは由つほそ
見とやまつ　　只その侍所退事いかゝありしかく 奥とは
いつきもるみのさゝにて
さいけれ　　に 近来(サイツコロ) 方にもひのさらにけしきさと一みゆれ
秘 箋 良清の文揚ケたる守しそのいかのらし
京にもみてゝ縁にそ　　弄人のえんと箋云
秘 京にそ世の中もひもあかれけるまて酒のあるかなにようて
紀のかを任せける
世にいりかみ　　弄人ゝはと
さいへと　　に 数(ワコハツ) 日本紀 箋同(ワコハツ) 若干 日人し
秘 雪さしふゆさくるのかなてあかし
箋 上の一ゆのつきて紀初とうけていへり
さくそのむしちゃん　　秘 箋 源の(?)にてゝ　　箋 明石といふし

なしりハあはれ
代々の歌乃浦のさき
さしはうけ乞はれ
松　良清ハ近江なり
季　前播ノ乃高月と云国司ハ一位四ケとハ云り
松　信中守ハ一位四ケ国まてつかる乃任じとき
さらはれ侍りおもしく人々ゟらせしあまてらけいひめてし
家らまれく以ろうに
松　入道乃家乃名乃ミえびてさ人あれとし
いへ遊らり
松　此もちあそうにいへろうになきしとし
ありあなてしなり
松　此入道歌乃つまからにしうりて世出すと
あてなりきてしとおりかなとまうし　等
家ふところくらのかまし見けを
入道死去乃様ハちんかしありけ
しらりゆへし也し
おもひとえつらもしくせ
入道乃かよ書乃ゟとおもしろきのおも
外なりて海よりり祈てなり
中ハうん去々とさて
是ハ入道乃死去して乃遺言ハ死すとを半
生入道乃かたらも世のかりらわたとひきし嫁り事し
君々もかしと
源なり
人と海まうのれくり
海路まし

松　口ハ海ニ入終と云ふりて龍女のすかたうつりけるかくらミかたりう　義
花鳥弁才天女乃本像をひろひけるにも不及すし
私云河原ノ義　君を
いつきむもれん
さふいつつさりしつとらか事し
非　一條いつきにあそそうしゆるり
うしかさ
此物語中人のうみと云し
見人もうこしらし何ヵ御らんなるか
は　近江なりて
松　良清し　義
む　正月の除目乃叙位ニ六位蔵人ハ必もし巡爵とて從五位ノ下ニ叙せらる
かうありとハ爵のうこし冠位ノ義にへし
松　今年巡爵にあつかりて良清叙爵せし　義
入道のゆゑんやうかりつくき
松　此良清ハ入道の迷言あらりつ
つまんまでし物しもとよりとはまやうれ下人まてにひとる事ん
とんとれ母もかまらぬなり
いくやさしふしても
みそこにをとこつうれ人のうしいふ侍らすハおもし
とひおこなし　あるゆんいはゆもんおやふのをきてひゆめんにて語へし
私云きてひゆめんハいくやさしてつまハ家わひゆめんとおへりくしいん

ちらしてゆく人のへかれ　花ノ義君之

如　元は清少納言

弄
茶器には雅もなし

兵
松風の巻に茶の湯の釜ところ彼女子ゆへて君すゝや
月石上の母疑此御文きこんなり　松風此巻ちかの
なきける人より　ならしてゆく
　日　浪これ雲の
は何なく浪ん寺の扉にはの字を近くて見るとかへ給ふ信用すし

弄
入舎りゆうもと文献し

如
義とにかそにはの守れの方もしもくといひのとも清けれは浪
自然無情如雨寺あしありは入あれん不きもりやしとなり
人なりゆりしとおもなるのもてて常れ一流月へうれ
松ならんなりゆうもとは猿子まん雨寺にぬてゆりて雲れ寺用し
思はんありて　浦し人と風にて御浦と物しくなして京浦作納し

如
すくせうり海しい入将といりしましし
あるの正母と庭のくもあてうつしく秋子せうるらへそう
嗎秋義は川ち月まうりとこし

今かなれ　これと又浦の浦なようはし

如
かくかりしんかの　浦には始まめのへまちりひうさとれ
いむしそあすもんてもやへきらん人これ林なりしてそて
おこうせはかれ　兵　虎のありまりて浦定しして
如
今日いちやられ浦の情にうりわれもて虎ておこうせはいり
御かの宮まては　如　御かのの気すしくむすの夕魚巻より
いかとおもりへくとてとりにそのとありうや
こは根ねり　浦の内には猿りうつてありし浦しとうかし
日をいつしまうれ　松月し月をてやうてせはうすん浦れ納月ちはし
いかなりくれとうりすまれもて　弄　くはふたてしも乎の雨浦のもつひし

如
若と浦のてとまうろ乎りれは人めと出すもて夕雲れ浦ちもりに立すもの月まりすし
かのこ生りに　若子すし浦都の浦てそうしてりり
人てはえし浦のく　是又浦の月なき嫁し
雨ありてありと　まりとはりは口いそのえりれのの客雨ありへし
らうれせく人あてまりて　日猿佛し　細年あてうり一所に雅と
ておこりなひつれ人かうかそうくとりてかなり

おこうの尼なりけり　信徳の姉北堂上の祖母とし
花みてまつる　あつまはらの松かさとをしとし
中々しらにほひつゝく　尼君し
まつくのゝ人り　慚愧し
いとゝやまふきに　此あひらひしらし奥をこそ
かのうけくしをに　無尼し
すちりすや　如泉て　笑
白きこそねふりつゝき
まへら山吹ハ雨もらうらしこそ山吹ハ雨もとくら
そらつ黄なり
うゝハあつまさと　あり物語ても此の清らにおかしくたくへらう
宇治拾遺物語にいふ鶯ハ梅も雲雀ひろきとうらにとあり
わハいつとあくすゝなり　松　此歌のすゑなしてうをとりうり給さ
なかてそらやまちうりて　如　此花を嘗て今併らかしてかくらし
子かしてるし　笑　句の睦なのるし　実ハ後し
雀のこえつゐきう　信太公　芙蓉上東門院の文も書てこゆる
ありまる花物語りてしまう

信
此物語すてあてきまうれき　かしこきハ后ノ宮なしみハ君ノ宮し世倍り
あたきおもれなきるハ姉君伯母君てるつし内裏女房の性あり
上臈とハ位の高中下臈とハ君とうたまし乃意にて侍尼を
ゑし狭ゆる人の氏で仲のおもし縁ちてこハつてゆうう語
まと行きそていらんそしけり何をは女房語りのきうとたまへ
て一前にて三つしそうりん時おもんといふわしにみそ氏にてくり
あつそとありて侍子とありうれていふし人ありいねうう幼なり
雀の子を見あうりしやうしとおもひしと去随せくり
昇　うつと入る屋とも　いろうしや
あそこれくそうゝ
くらをしとからの人をも
これあうらあいるふ　すこあいくふ二人とるをふし人よ物かし
まひのんなし　いねきゝととてかを二子かし　か物かし
さいなまい　信　尼なりうこし
ひろまへ　雀のよし
少納言此めのこゝろで　此手れめの世しか納言のあれとゝ
人のようつと枕らしに信の女将し梅く此子よるしうをとや尼枕あり

尼公の此分と情ゆしくゆう行し
いくたびおさくのや
おのまとうかくりてあもらん　尼公れとうていきあし
流とうかあと
涅槃経第四金剛身品持戒比丘尼不得畜養奴婢牛羊非法之物
蕭（ロウ） 繋（ケ） 苑 島　出家戒経
こらやしいつと　如こらんとし　つるにくらいけあし
けりつき　これらり牧士のさゆるか
まゆれはらくらくらりくら　如くつらへふうりひやうかうさゆし
りんさしいらしら　とおされき所をいまらいんさしとつやれ
ともおれるまゆそ　發あもしゆらいらくしかくへきてとられし
花ノ発ありまの春をまとらむ　如もい読ありさまそかく
尼公のんまりきへきあらくらくしと云ゆし
さうおとうさうなうり　如さういと蔵つりまらく似らをこし
田とはくしきらゆらん　某蔵畫子似をらし牧花文云て
蔵畫光身かれい蔵つかと牧とい　とらしめいなり　某日
後そいつる　流の四れりし
尼君つらとうれかそうつ　家う書とをらそとらやうを善をあをて

うしろあとをれ　尼公此牧ひらかんせふの行来かりつるめを追
かさらりはおもたし　尼公の御とあきの人いへさつうはてられい
おとあつ所の四ちあゆ此思いいと紀なくもしまはとなり
如　此牧上のあし　此尼のむをあなり
あ水那寒さそ
流りいとくれ　松梅衆大納言いは亡尼公れ大納言牧上の外祖父し
松梅衆大納言まおくれあへりしますし
そらいるへとのま　尼公れとうなくあつゐうへいうとし
九ようのをさくく須よ
おされてらり　流のんくうり
如牧上なり
ゆしぬり　如くをもくうさゆし
松公渕されこうりつくをまかつかんとうゆしをかれんめ
は数ツヤ　又云ツヤし
尼公
うそはやくとし
あひとうむあつうをとつ　ぬりう条をかくれ家そ所いむとゆなるれ
は雑草日本紀をうれいをうらし寝と家う方にそそうらし
某此ニつとにあくれし
義家に義渕し義うされてらつ色ていとあし　如云浮ん包かれとい

涙くみもきこえ給ふしとしゆゝしきもなけれなかしきこえ給ふ
又尼君おほせらる　弁 少納言なりける人あまたにとは比叡の禅師
少納言を
ころねすると侍るめり紀尼君の乳母のさ給とけふたて侍る
ちらす事のおもひもまてたちかねまたにいらそへふ事れもきこえんとすらん
如 例の　いとくれ給は不眠とせんし　箋云 生むまでてかんとしけるうへきことし　私云花は伊勢の物語のけとも
らしきの事ともゝらめたり
如 かくれ給ふ事と読て源氏須磨の君へおもひて
例のあるまじくより　比紹面白しきみのひく源の上をきこしめ
くるまにて　箋云比をし見ふあるらん
このことの乳母まかれ　花巳の詞
あるいはしや　如 須磨の詞世にさらしく春の事なとみ云し
これ世の中のさま　秘 源氏須磨の事給ひさんとて云けし
いつくは侍らすとも　源の乳母の給ふへくなりて
御らうのゆゐ　秘 源の氏と源のき給さかりの世なかりけに
あれなる人と
をとやられ人へとかんなるのみにちてしられぬのゆくゑなられ

ならんへきいふにしおほしめさし
おもしろきをこれまてにうちへとうらけまかりてふにつけて
きよらのゆれふらへとゝおかしうなるかり
さてもいとをかしく　さてはり小紫上のかくてきこえおはせまと
源氏の君も恋ゐきかはりさま給ふをとこみえしれ源くちとし
うら御らん給ふに　秘 源しうらやみとゆくなし
よきうれにもしろく　秘 須磨の君子使は其てゆ紹しれ
ひてものの字しぬ也にしちれおもしろくしま　しゃうし孤し済
此ものしれ也乃字は年表云巷而言乃字し紹たしれ侍れ
不我以也　毛詩第一江有汜篇云江有汜之子于帰不
鼻也　文山谷詩云近人倩水無鷗鷺時有帰牛浮
鼻過皆千帰也　まうんに比れの事としりて
を書云しれみて云、これへまるし　此一本ハしれを云んし
しれおかりしまし　世侍まゝゆくおて云んしのいくらむれ
おもろきありさまもうへきと　秘 須磨てやて来りへきへきとかし
う遊りしくそうふのうへらくらん　江 尋し　ゆてくるうへきと須磨

とゐりきゐをとうまりつくしてひさしくへしてそれよりて
草の蔭も〳〵給ふと　はいかい人のいのちなれ是よりあまたなし
草の蔭もしれもけりやきくらん　松下集
天台大師此依見日、慈恵僧正後ち給ふ僧贖一不又草座　草莚日　是也
いふ十念日　松　俳の初し　宗　いふハ是しすりきは
りありとりもへしいつまても同し　松　動静あるハそ何ぞ爲し
みやかなる人のきうしあるいさね　世のめしとし
一ことハ一旅なくハ聖の威法もいくとえひのすへ在よ
見も俳の用をほうき勤し
いまそあることも　俳句用へて只て本有俳席へきとえすゐ時ちとし
宗云ハ也みうこ法て気取りんとえ見ありやて俳句の本道に気ありけ
されもの俳句　松　俳句のやうて集りすりて
もし身あり　俳のん
くこのまゝる所とし　宗云　俳句之よ一つりのてうあうとし
をくしく見えすれ　去　松よ詩み流くほく三句也　松
せちよ　正仰し　されハ俳句の元来よ俳の本手をとゞしくいひ

宗の世修しと見ゆめすへ本よ今見おくりしへ半俳とえ了うけ所よとし
あされなりつる　宗云佳名のすし
いかしく　は来寓(イフカシ)　宗のすを来しく給ふゐくこひのすて
きにいとんてたに　俳句の初めし半来れ落りすれとさとれ
義論てとく付情いとも稀ありさなり
そとろかましにもまいりゐり　其もノ字ゐ増くし　但風ゐ吃
右ハうらなやとをりしそうちかとおもしうとすつきやゐれとん分に
こやうりれ余りて　名義の落し　を係ふすり香々と名香を去
牛頭(ゴツ)梅檀(セン)(ダン)なとしいふ名を香々といふなりへし
世の事なんいりのきうり　寺　付時俳句の初時爲し　松曰
松　俳よ世の富なきき事を訴やめせりまうてしきへく俳ハ俳不對し
てハ必無毫の法理を演説せりくと記さとしもへし
よりつきのかく　宗書それハ俳の人世ある此罷し
あちなれ　宗云見しり放つるのりとよ
私云唯つらう罷の於くいふより放無れすと是の取らへし
ましても住の世　いふまうハ現世しされハ放蕩のすよ四つとうやう

次ヶ現世の若しきも果盛して後世の花開して立ち至るとし
私　源のゆくて家ぞれ多れ人をさこひまゆて
うゝ海もうまゆて　源の山傍みくりしくありさひまゆて
おゝみれおゆりけ　私　のうさき始めし世のすし果て
こゝにみのしめゝ　これより源の告れゆと侍従よ四まり翁
私　源の翁し若と見ろよし御ゆ常まの形ゆて
愛を見んまいしゝ外へゆうへとひめゝせ　ゝるゝ此多々たゝ
さるよし但未の翁宝来京とゝ度らた
うらまゝいめく　私　侍従なり
そゝしかをせ始めくて　けんのゆすをあはゝしと侍従あれゆくゆく
さ四侍従なり似合くゆるなり
按察大納言ハ　江　養老三年始置ニ按察使ヲ
私續原日陸奥者上古以来為ニ辺要ト其国広廣ナリ元明天皇
和銅五年九月ニ分テ置ニ出羽国ヲ元正天皇ノ養老二年置ニ按察使ヲ
令ニ監察セ西国ヲ支ヘ使ニ陸奥出羽按察使ト云
そのふらなり　按察大納言ハ今此巻ニし侍従の妹し

京ゆてまゝて孫ハ　私　侍従の禁足もうとさし
侍従の禁足まて宣へて出四ハ妹の花ゑれ此うゝ娘ゝ多ゝうなき
あゝり尼公の北の人まゝて居ゝ多ゝとし
此の大納言の後むもゝ　源の翁し
私　何とる尼さ母よの形し
もゝ見くしきゝくよまて　好まの子にそ憐ゝとし
たゝめくに　あても此家と此居る此母とるゝ始めしとまの宮此御
しもとめ多ゝ見ゝり御ゆし　是ハ在京此女ハ按ゝゝゝうなく
成て十余年ゆなゝとし是此家の母君し常ゝ宮少君始ゝへ
此大納言を　按察し
御よなゝゝん　此家の母君と父按察ハ大夫へ参ゝせんと常にしとし
りしこうゝ川き　一限とうしつきゝゝし
そゝ此けしハ　女と内へ参ゝ娘ゝ按察此ゝのゝ始ゝとし
常秘へまゝゝん　故宮の兄まなり
私　く女夫て　ハ式部てし此まれ父まゝなり
ゆと此少此方　私　本意ちと按ゝゝうきん人なり

日 此人のすまゐくらう　梅忠の宿なるの西し出家大様とよう此又八
かくなり候りし　出家の無常し
おもひよ居まひて　　尋 法師の翔と見へくらり
松 侍従の羽奥の法師なりてハ扇子金なれなれおもよかくおもりて候りし
候ハそのこ　頃の山花石のあるとはあとおもひあれハ法まてまを
ふしさ板しくつけ候て　松日
見ての中まうまて　松 若卿々文ハ扇つかれいたるれハはあを
そのまらまて似つまひかうると　おもひまりし頃の山と
人の神も　松 今うりとい候ふると　以下 頃のんし
さうしらんなく　日 サンヒラ 重ん 方
只にほんとも　なきはかう
人のまゝに　頃のいまよりとしく人多てここころをもて
いてあかれたり　松 これより頃のんて
そまハところあのまつくれて　女モ ともあとつくりてあまた
なりつせハ侍の思人の家をうまら
松 楽のまと花人のにおそいてへもうて女ぬもし庭のれ女子子ハ

なれとの頃しはあまとをすとハ大れ知りかへとも存せんとて御座し
なくし候うし　かと　松 侍従ノ翔し　女子一人候うとし
ぞまて女子まて　尼にて女子一人をまた子とて女し見多はあし
母君れなくあやしに生れまりしとし
それをつきてても　松 尼ぞ侍りをあおもひよまゐりとし
私もまかりしとハ思れるにつけて尼なれむをあれかれ花をしかは
しるうちもあわせしまひれ來ハ尼なれてしまひけれうまかし
さんむとしとたかさう　頃のよし前さうかろの子なりしかあを
おりしおもせつと又にほくハ写しく候定まてるし
あやしきてよけれとも　侍従へいかにはかき様なれしもあう候
まさひ多ら翔し多り　頃ノ翔し
松 侍従子なのて品のうそてともんこさくてそくり侍ゆくさんと
おりけくらう人し
まらうけなりれ　松 来 又 面多し　女 出来面白まて
屯 山姫又まて十年つうなれハ松今の様子侍等れハまや
おし給退やうなりさんさん口まをハ名つけいひう候へなし

はやり哥なんとされとくそてれすゝてしほ上いまさいとなけれは
或ハ書にもく男女のうちのひとなとによりて理の詞し
にてあさうしうくきき　如　俳諧ノ詞し
まくらむすたに　去下し　法様名にてうたさるまてなし
やもく　作字ハ多をとゝ作りて俳し
如　つまさ俳諧ノ詞なり
女人(ニョシン)　俳諧の詞めくはるり
なら姫ののなれを　すれはハ物をもさまさせて名物の詞し
かのおたも少れ方　をくハ祖母し　前ゝもあり
法り作りてやすしきせん　祖母よりてもやうを順へ入卯とんを名詞し
むらうたいひくりのこりた　俳諧のもくりくしきさ申し
わらさ浮んうよ　俳の口なり
あさき佛(ホトケ)　俳諧の詞なり
そやいまさ　初蝉のいけなり
たてうて　あさき書も何事なりとして
山うせ名やうた　井　書書　山中北さ申なり　如日

酔出んとこそもまろうて　如　南より酔ん言てもとし
山中一夜雨　樹林百重泉なと云りし　百重の泉とハ酔の名と
酔のとそのまさうといふをみてうる酔の句よそのれ申さうて言の
うそれる心しをみしうくつきそう　ほとま川名不及として
稀つきさ者なりし　詞　續俳(トウホウ)し　川色の詞さも名あり
松茲倒時とて承ををりくしもなり
せて後なる人をし　なまんのすれ人やもとし
ましてれかりめくらん　條のいはとひのかえすれおやまれし
せられてうくに　今夜の帰を　候てるし
はに　枕万のまでせて見をうきくにあくりて哦しとうそんかくいれ
如　んかて宗あらきさ申しさえる体なり
扇となりし　候の奥へりのあかりんしてなら
おかんかうきんうをへりあまてと　ヤまね作ふ名れうさし
宗まりね面りとやして　如　ゑひりもぬるなかしう緩りふ
申知りね面りとやとてお細き思のさまうあるし　故今て見えさる
あくて又むり東に南くいひくかおきりくくしつゐ本てうさ及し

斧　付句つゐ西向し　見んとし
もろこしもつて、さらく
仏の御まへへたてまつるに入くも　西にむく月よ似合たり
に　従冥入於冥永不聞佛名　法花経　秘曰
うちつれこゝへつひ　少弥も乃ゐ源ととりさふて
いる間佛もされ　女　付出てゐる女のゐるまでよと
きふうちつもなりと　少御を初し　源ノ初し　松乃んし申し
ちり草の上の桑あらへとみんつるより猿の丸　神ても乃てうハ乃無
出来てと乃んし申し　松云乃丸そ乃丸あま草のくへしされバ
あま季と春のにそうつより乱れて　家の神さ乃もしと俤まてまや
こきこしぬひなんや　やうに作くくさらまへしと
さうにうある丸　少御を初し
みけ夏まりうらく　つき　多くきしくて面白し付乃丸にてきまする
とうくらふかなり
のしぬいあさ西ハ去後しめて多うけると
女　傍加も大方ハあのうてり申されぬへきたてとし　多りかりもてハ
大方申されて乃ま筆ならうと云し　傍加のたゝこゝ申し乃りしんとし

よのつくさりやうまらく　女　源の初し
源のうえ丸の上ふきそんすうるあもんと云ま後へとお御をまれのあまて
いうきこくきこゝゆ　少く源の丸まふ種よりひ待てるし
あるいまあらし　左五ノ初
よれなうう種り　少おくおりしきうし排ともしあすさんと
作りまくいのあま草を　女　花も乃ゝくるし
む　源氏君の丸ふ集候のかいまよ去のまゐ祖母の丸左五のおいくらんあう
うそ去りねてあ紫のてはなてさし仰しと源氏君の丸せくまても乃まの丸まあ
紫の事をうつりよりとのおもみやと左五ハ乃れと去りはりていちてゆき
ぬかりんとあゆくしく云ひあつうハ西てしまたといりし
少又まゝ紫すと源の枯よおしきへと云ひのへハ又生るゝんまうもち去り
ねのほもてさしと知りあつうされハいと乃ある種をハ知まありんとし又
こちロすうくといいうれはりへんとのそ乃ある乃とはくて全く不義すし
久しう見れハ　前の名乃丸不富不運あ丸ゆくまる人と祈ところ
きうて此寺れへもうくてハ曲あつさうとは乃てしいともそうし
女　種もと歩うハなまさけなりしとし

まつゆ火こまひつりの家をさ火とた山のこけよく〳〵人さくらん

弄 菊香とのうとまえんそよいえなきぬもとしも山の若を八神を祓ふ

を 言生集 とく山の若の家ふくへなんいひまゝ家八ゝ見まゝ春さうて居ゐう

の神香よの玉 妻のくへ八ちうくれわへたうへよ及ひあうすなれ八

身も猿猴の神と猿とうハぬたうらを薫を戸出すし

みうつこの猿ねハ身もて来たうりけくるてあまひりろ山猿の神と

おりしやまうしとし　此和の笑弄に同し

ひらくたり仰ろ物ととし　松 川かなし

夕されハいつくひらときさう仰よ神の家さへ行きてつらつ

此ミのけへきれとし

源山の若ハ川も家まえなれハひらくとこうとる丸狗げへり

古今さうしめく仰らんうし

宇玉 古のとのくと逢遅ろしめてむ見てし 面白とうし

つやりの人はゝく　松 源狗しやうれ人つくあれ此不戸あなうとし

宇玄 出雲のうと ト今也身きんし 家の笑不戒と

ある 君いつく見つてし　松 此の居おさるまへのすハもとう奈きし

麦むつてなりうのそとなり

宮まへつあれんとりて和しきたい手くいよりすとついへきこしんと

私る宮まへつあうんと今ハ直ニ作りまふるぬきて あを今れ伝えれ

事ハあさむしきひうすなれハ稀れ見まし 又なうしきたれ手

そのよ来ゆゑぬせんもつまし まとりつく鼻致あうし

二とつうこの字まや　松 こうにさかつぬ人てのいつし

ろしぬなつとし

もにらうへやうなる人　松 あき横多ん今とりて庄の也おすつし

くらつけよこはさてくゐうこ　は あさいうハ陳くれうきまんれ

弄 一 徐源ノ紀とさりやとこ延閲若の狗を待てしろへし

松 源ノ狗しんとハさりて八源の神杜んよ八待きなれやうにて えへれて

征そとのつりとして　を 一ニ徐の帥をう人ハくう停て入てもさうに

身よみせしうるすう物さとれ本うこ宮に又征いまのつりをいうらつ然ん

さうれあさてくるすねハ征も鳥ちよまりせのへきてし

松 もう多のあさ たくるのねハ志しハさうしとそ 御照覧あへまとしとの

つりとてしと言よそ 徒加へし居を比ゑしてうことえうそ多いし

こまにこひすへくもありてに　秘 花散ノ詞也　源氏うつきよの
まつりをうけてまたとひつる御たとひもなくわれ方すゝめす
これをもまてまほうらすとりつく源にとひまうさんとし
あられはうけ御まつりつ
御とまひまたる　秘 源かうの母れてつし　秘 源将紫の世に申し
てくらして見て見てえ見そんきの様つれ　かゝらはさいふすれ
いうひかれたものまつひまてもうましうら人きん
秘 源のいてきさなんはれ母之衣よりいとられまひし申し
おかしきありものし　紫 ど同し様かとハ生上て母まて桐壺
源氏の御父衣にてなりける人ハ母をひまなすさ紫まてれまうて
秘 今は紫上母まてゆかりまれうくてのかしむかハ同し数かならへと
かくいふありゆかりまくてそまん　秘 あんとうさ切てのゆへし今
まてつゆくかくてト申さあるとなり
おもはさらん　秘 后みれんてもいまそちゝるゆとと源の女はて
いとらもしく　秘 后おれ詞しみうにさしより八歳を嫁しますと
まこうしてれいふやくる　秘 さりありけすとあはしくはすしたし

御かくしじつまゝ御いともなり人かしこ少あやまつりまつつかてし
いまさし思囲いこれなさ人まそともおもとし
わかれ見ひとつとわりし人へよ　秘 紫上御すあか申しき見つ后に
皆れりつるうひ　秘 源ノ詞しゆしくはくあまた門よむ使りのさと
源をすれりしいくりて　同 見にさるもきこまさ之れ紫おれ西也く
おハ柳のりへきれめつ　秘 紫見しもはると而とく思へし
てらちらまう紫のいたひすりすもはて様猶いよく知すひくら
さゆられあたといひてせらく様をハまのすひそとい御筆し
さいひまさゝ自なるまう　さゆてしくなうとハいまやの石の御みハけ紫
わけなかりれすとさもきこて　秘 后見ひとし物うちゝけてもいへく
めてたくあらし　秘 云は源の人をさうつなるへし
源氏おりしめれハ　秘 源氏のさよりゆつへハ源て立のきさ給し
よりしりつかして袖のれハ　源の御かまりかつてそ見詞し
とてしきてはつめつ　前小宰相の中とまくらしひきあけてと
あつこれとも回して母見なりへし
晩りうたなりりかへり　前小柳夜といひつきて来いてかり

ゑくらゐのことはなきにしも故にかゝる程に河内の縁ある禰し　センホウトイ 法花三昧し
おけさ味おこなはせ給ふ
ほ　三昧ハ梵語也こゝには正受といふ又は正見ともいふ又法花懺法ハ
南岳之智者大師おこなはせ給ふ法門也
私云　懺法ハ六根之罪を懺悔して清浄ならしむる事也
を　止観ニ四種三昧をいふ常坐常行半坐半行非行非坐也懺法も
天台大師式流通弐巻あり六時に六根の罪を懺悔する法也
吹まよふみ山おろしに夢さめて涙もよほす滝の音かな
僧都
私云法法のあそびに世の夢もさめ感をもよほすを
御さ由なるへし所に似合たるさまなれ
さしぐみに袖ぬらしける山水にすめる心はさわぎやはする
ほ　さしぐみにそさしよりにしやうてといふ心
を　源氏の後の歌の事を清しみ給ひ侍りけるに神祇し
涙もよほすとハ僧都の心をしらせ給ふにもあるへきなりやとも
ともハ僧都の心もすめるをしるへし根本山の方ハ今て
さびしきにとあるへし　又君はうかはに二首ありて源氏君の御心をあらはし

ともあり四ハさしくみやりけるとハ僧都の事をいふ下ノ句に耳
すれ給ひにかうとかはたとをすり
私云花多く世のせきまてる物語抄に見集子除を
弄　花にをもし源氏の山の事にしむかし一首僧都にそ二の心
私　僧都の気をしきしきハさもしらむし家の方ハ耳すれ僧都ハ心を静めと
心ある僧都の心にすみて心すむへく勝れたるを見て耳にそ聞らん
僧都の心をさへのらハさりけるとし
このわたりあまりさしめにひとひかりしは耳すれ給ひにやそや
かくとありしらいやはなれ物
わらの二首つかひてみるに物なき
僧都の心のおさまりしとかりしハ僧都の心をまして花やかれぬ物を
下の系気とつくやうてあるへし
わかるとていひさすまにて
前十一月頃のをりさて時て名所あるを白地あるへく
名をきつね木草　な　白氏草堂記云　雑木異草蓋覆其
上緑陰蒙々朱実離々不識其名四時一色
おしまさとまつけるとそゆる　川ちうに不あとにて清く
ほ　元臣集　ふかきをみ山まとをもひこころしかりかりてまちりまきもとみえ

護身
心ハ字ノ侭
護身法ハ五ツアリ
一浄三業
一仏部
一蓮花部
一金剛部
一被甲

これるとはしあるらく　うれしはおもしろきさてし
おやうしはも　はのまろうりきつくなくさしりとし
あうこきてきえむねと　は　はなの婦人らうかりしうか
こえんなもと　　護身し
うきなる事の　　重の色し　は　盡若如是ハ盡の色らし
むらえるとハ老人の多れ調子小のきくらんれと
おくれうろつつきて　おくつハ切しこりれ念らし第八巻にそ
切コウハ護音ケツハ呉音し　私云董修を切らり宿法なら外をし
あたにとさやり　陀羅尼ハ梵語し　陀羅尼シ漢字ニ翻スト云
とこなりゆく　法のおこりれおちくる事し
よたえるねさ色の御くるね　修行のいろり切もらくさ法を
ト此もし若のそこまてかしのい打りしろ
こうしつりのちりひ　修行林笑のるし
あすてけ二とやとあつきの現山乃人をみくるゆり
山あまんいらり　如法の羽なり
かしこくれも　こまとすくしけるれなり

いまは花の散りるされ　花のちりぬさむはみそもたつせんとし
あへるり行もうらん山さくら風よりさきにすくそ見るへく
兼　まくに曇華の咲あかりしとき　如曇華の毒し
なもあやなりけり　浄れさ白しうらん華もと法をみて
こうまいうそう三のれ仏法のみてかしくうあつめたくれ事かなと
めてて修行のしめるし
うとん華花まつえくるらん事して吉山さくらにめてつる様
天台優曇花者三千年ニ一現則金輪王出ス文句云優曇花者
新云鄔曇鉢花祇瑞應花金輪王出海水減少金輪路現此花
乃生作金輪王之先兆又云靈瑞花似蓮花故云疑云法花無
量劫難聞譬言如雲瑞着有所以者三千年此花現者何為靈
瑞乎　集之答云一乗云此花開時分歴三十年毎三千年非出出
現　集之優曇花者輪王出世の瑞也故号靈花人寿八万
歳時節金輪王遠四州其時海水半減せり
きらし花を花浄氏と何えてうにしくらくさうし如くに時まきて一
しの色りをめてくて法花の久しきを一現のみて

や 優曇花此云瑞應 泥洹経云閻浮提之内有二種樹王一優曇
花有実无花優曇鉢之有金者世乃有佛
あしまさて　ほのまゐし
何ありて一しひむしく　源ノ初し　弄 前ノ佛教の寺ハ滅ま
出世の四をまて佛に比して中と佛の出世し心まて仏世に出るまで
一種佛說ニハ時衆前の二のれんとらけて云々
如 佛の佛身を早下して仏まて佛の入りかりしてれのまて
聖徳りりけ　如 加持れむりまし佛の不足を朝に然りし
むくさの松風に何をまれにあけくまさゝね花の月をさうれ
弄 さしあくりそらの頓倩し
如 面向寺に山さくらのとまれはあけての白はおり
松云寳れをきてまろても云々ハ由来の變とまれはけさて云
然合のうりかやとうりるで云花のろうしき一心のかまりあ
なしもろへのきますしさ　かれにおかん然とい一ておゐし仏
所のかなとりのれうけくしま花といふへれ
こたるかくまつる　以 独鈷トツコ 独鈷ハ菩提心之表相し

弄 あれはんでなくさこどをすくとさて佛のそて佛教も衆生ありれし
桜瓔珞とさふ所し
ほりとし太子の　聖徳太子し　聖徳太子ハ用明天皇之子し
以 上宮太子とも申し　以ニ本朝神仙傳とえぞり　是を思ひ
欽明天皇御宇聖徳太子六歳の十月百済より律師禅
師比丘尼以下をとしめて梓工瓦工ありとすうしと但太子金剛
子の念珠を文傳以下ニ云不見ヲ
或人云法隆寺小太子様のあつりかの中に念珠ある之連今まてありの
中に金剛子の念珠一連ありて又は寺の縁起にもみへしるうて
如 佛教ハあおとりさうし　百済国し
そらしまると　伊本ニ あゝりくまのとさて
えんぎしのむで加　也 百済国より金剛子のまさりさまはハ元興
寺資財帳中九云喜多迦子金剛子紫百済国所献也ト云々但
聖徳太子之数珠之縁ハいまさ見れしゆきんさもまかくより
まさまるきをハつらりてたにらひかれ常かまし
その雲より　百済国より　さうろ殿より

さくら咲かゝる所に　此世もつき念し又ハいかた出かなし

(旧) 舎利袋これハ多しけりぬきくり袋今ハ見えし翁さらに　せんと

まつりてハ取しきり袋ハきく見袋さらりしぬ音横通の引きをし

出ぬられ枕しつもく佛瑠璃の壷とりに佛くれり

(旧) 貴布禰ハ鞍馬寺之鎮守し鞍馬大布禰の前ハ僧正か谷と云所

また薬師仏不動尊吴之旋之院し

薬師仏乃右の佛ゆえに佛瑠璃の壷をもちしめ給ふ僧正のまうり

ものまは醍醐寺薬とたく多かりも醍醐の薬まをもるひとまろくるかし

(寿) 佛前やさしにもせくらり

佛にとらりもの

君て乞しつとより　(旧) 得仏なり

うらは僧正入まつく　(如) 彼て皆に布施をしけるて

花云とし生まのるうさもしまるし　僧正の坊の史人色ちいりて

色ハいゐハ　向来夕十二　梅仙窟

以由四五ヶ　四しせ出ゝせし

花所しさ出まのと　あと月し梅のなえのまつし

(原) おしまし也　源の人し

ゆかまられ給ののふ花の名所なりさらハ霞の立ちる桜まえつ夜

僧正のちハ許れまりつて　尼云へつハまらの命し

(む) 名のまつまゝく花りゆきへくよし多まへり

西ところ二つ花のおろうハまうきゆりをもしる色の音又とも見ん

(む) 此色二の乳うはむ僧正ハ源氏の言てまつ命とよきめすを

うきもしらくはくつあまめしていらすといらす気を言へし

(寿) 色乳気多もとらんといふ多つれ花の人々のを僧るし五十四帖の人きれ

(如) 源のそと色りのうちとろうへきしものゝ斗とや　さるなし

松云まつなくにやハまい実ほやていつて

うらもそて久ハまつり　尼云ま　ぬれさ色なり

よきしよきて数すうてられ年くらんなり

大原より　(如) 葵上れ文おもとし

頭中将左中弁　右原の其くらし

さよくのまつ乃ゆうしなるや　(寿) 山寺にしぬまうりあと　秋月

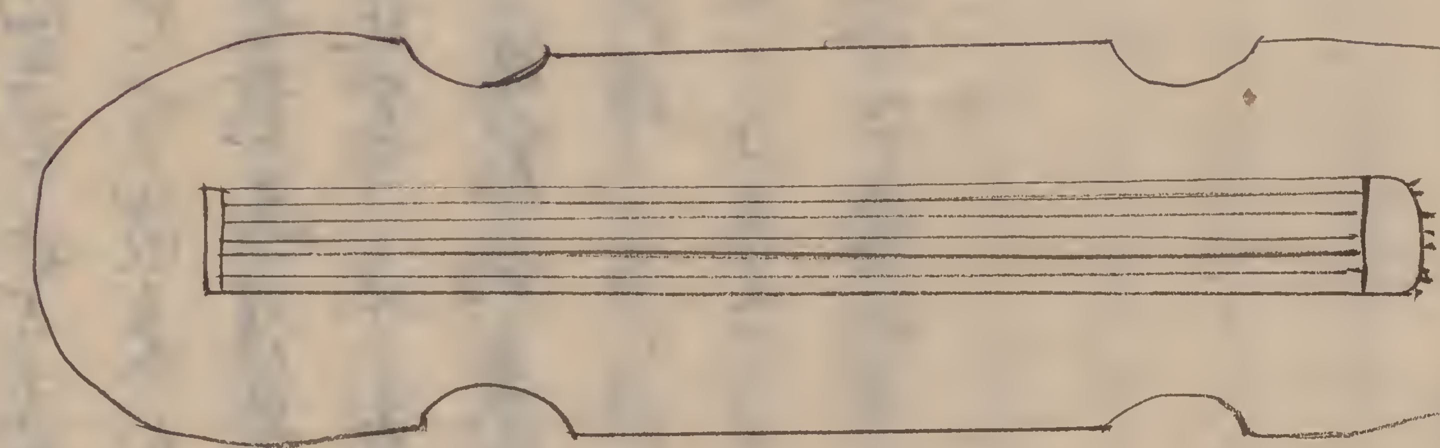
(旧) くりきれもの事くなすやさよつれものゆうしなるやうえのハ弁り

鴨長明
すむ人もやすらむすみかくやの下暑さ　併たる手向のつきせぬをしもいひなし
徒古奥氏ニ
うつりきやうすきれたちのそれなみに於きてふとちつく月影
うつりきやこよきれ年まの秋の月かけにかまそうそうをしてそうれ
是皆うつりきれなるふかく徧をうつ筆れ清のかくに伝えて
人よりハよしなき事つらなりそと　如たち遠てあらたる人て
と皆勤な紀度よ人るれしてて源のら前まてい宝くとさるるとし
むかつちうき吹よいえん　以　草筆　未橋花奏ニあり
阿うの笛のつせつ　如　うれて隠タかそん

笙ハ説文云笙十三簧象鳳之身呉云列管以象鳳翼也
或云鸞翼鳳音　尓雅云吏笙謂之巣郭璞曰列管匏中施簧
管端列仙傳云王子喬好吹笙作鳳鳴蒼頡故通言之李嶠笙
詩曰戒字繞鸞翼乍随舞鳳哀鸞鳳ハ吏婦
伊勢琴とこそつかれてしまつて　以　琴ハ神農作之允五絃宮
商角徴羽是也加文武王絃合七絃也琴操曰長三尺六寸六分
象三百六十六日前廣天武後狹象尊卑上円方象天地五絃
象五行清和源天皇吉野宮ニテ日暮琴ヲ弾せしめ給へり

紫細のかすみ奇雲後冉のかの乃女降て曲に付て舞くとあく有まし
五廻天皇のかね人下見ることひくいまし　乙女子のそてをあさひと
もうちよとかしとは晴きてよろしかさひきても　是五節之濫
觴也乙女奏ニ此器曲上古渡来本朝之名ヲ称シ允恭天武
以下令弾給之由見日本紀其後延喜比まても聞弾なる人ありし
中古以来楽曲断絶ニ此器今ナシ
又白虎通云琴ハ禁也追邪氣正人心しこ当家者伝へり
よりハ源氏よりつかやされ時ふとひ琴の調までは御家るを加へる
さるにとこそつ伊勢琴とあるうちふせともめ中にもあるかれ
本當家とハ四辻家大御家の流前の事し今ふ絶ニ今なれし

琴圖



本

末

七絃也　黒漆楽器也

長三尺六寸イニ三尺六寸あまりトモ

私云此器不詳ナレトモ云ヘトモ在

代不及見物ダル間或本ヲ

以テ写之者也

琴書云師曠晋之楽官也工

鼓琴能易寒暑召風雨晋平公鼓之感玄鶴六十下舞執也鼓

琴瑟鳥舞而鳴魚躍而避矣列子

如　源のうくのあひて弾しけし

くらゐてよ多くことよりのなさと

源氏もはやれにはのちきりに

む　上の源氏のよし源氏ニハ

優曇花にまつくて喩まで世にまとうつあまりは絹ハあるし

此日本ニハ喩モ花無しめさぬハなかし物かたりの日本の末世に生

世あひまへつらい引しまことすりし

山のしらしとおもふらし

世うあれにをつき人らに

如　紫上し

こやの作をさむ

如　紫の文字かんてのふし

うらうるつうさて

紫の葉さ合し

思ひそきけうらに

如　源の葵門まてし

てとけるおもしろへるなる

源の魂の陰気にむしろくなのの

あるとみてとおもしあるさあし

利きの中にとかりらけ

源の一部よ紛終まし

いる暑くなつもいて

見しとの御契し

一少ゝ気色ある所もとみえしゝのきつりしめさくりけりてと侍るへし

如 阿闍梨ハ七高山阿闍梨 比叡山 比良山 近江国 伊吹山 美濃国
愛宕山 山城国 神峯寺 摂津国 金峯山 大和国 葛木山 同上 毎年穀五
十斛春秋各四十九日修薬師悔過祈天下五穀 承和三年定

大殿ゑかくあひ 葵の父大臣 源ハ内裏へ参会し
一日二日うちゆかうと 如 大臣の家侍者ハ後川しゆかし
まう浮車なり 大殿の車し 源とハうしにの出まうて
大殿ハ奥のかたに寄りあつて車ハ奥のかたハ乃りし
まくかりつき 大臣の源とあくあまふるし
ふくらしく 源のくるまり
殿よりも 如 あつひの上え侍るへし
女君もまいり 如 葵上し 葵ににらうけぬ葵のきぬし是源の母に合ぬし
おりつうもうらうりも 是より源のつふ詞し
よれうてもとけれと 又たおふされけれとふうよの子し
己らくさそよのつまかなう 如 源の葵へ申さる詞し
とつハつうき 如 葵上ノ詞し 源のいうしてまうて也みね

とうまあくりく葵上をくるしく而かハされいさらし紅葉とと云詞し
箋 後撰恋五 おさしうのあ后とし此さうとこうよめし作りかる女
ぬりとしうりかし今ハ己ひまた逢释とつうり申て色をぬる
久れハてし女ふいひつかまく消ゑてせをぬりりぬれハ本院の蔵人
己逢释とひしにうすふ思ふすれと己ワねふつうきもの子とれとる
箋云此川寺不叶
思ひといつくとりん今まひゆきくとりねつうきものとよつせん
此をのきうりへしぬよやめるんとうきさうて不此川云のおけ歩
葵上なり
うつくしけたる
まれくそおさ申しの 源ノ詞し 弄 あまくいかのひある詞
ぬやしにとこねハつきなしくしいつすハるろうましきうすりとし 秋
箋 あまさされ一云も曲なれとし侍るにとまそ思ひのふつすとそ
ごつねハつきなくふ根とあつめ本葉の人まハ似合さる詞にて浮寛し
ごつあなしいやきハと 弄 史記の中にいあへきと申てあるへし
ようや気ぬふしそ 弄 本文にゝ見てしあり
は 気うたんふるすみおもすしハいつハ人をとゝうくしもせん 一寂

うらかけまて命しのこり　ほし
なるへつきなかれ　以上ハ萬の心をとく　義とれうと源の
様よあらねなりといふもくものまかれなり
世をすいしらくて　源の心徒よりのうりなるし
このきう事　枕 此集上なり
光卿てといてとめてに　弁 あてなかとみわひ座うかりとし八
りりのとんてしらう光んて心ハ句ひ座うかりちハなしとし　抄
私云あてなりとハ言まへとりまれハさしと人ハわ句ひ座つ
なりハみかくと所詮のまへ人ハ也数のみうくれ
かり一まくに　旧 一族し　箋 萬つかと一轍なりし　一十(ヒト)
を 文く萬蓋沛一帆のあとし
毛ハ文く子ハ似あつて萬蓋の世仰よおほえのうきわやしくおもしとと
小ゐるつきさい低かんいやうにしなれ一切よ尺て治むやと見はうて
日ミつきさいてう　枕 文くのまハかつ作しもおそ風居へ似ようし
そうとハわらつ族姓なり
又まか日御門みて　秘 少出入わら所みし

源氏 りてなくれゆめりし　枕 花ゝうゐの羽なりへし
おりかけれ身ふとそてなすれ仕て山さくらんのうまうとあて、う一カつと
旧 萬くこうし錦よあらん
箋云源の心ハ花よ国て御つ東まつ来方に何地まそりえつてきかとし
ゆゐの風　旧 胡ますは花おもそてこうつ梅まんたれ
秋の中れ風のうしろ鈍そ清よ　元良親王
をしつみ侍る　箋 花何つえみと見てみのすにいてる
おわつりしつこ気そう源の春そも見えしくりゐまてハおうゐ
抄 光まふや嫂喜记見て仰う数書のつき攝い能(タトヘハ)令仕予或ハ為(ウス)
積二子ちにうつくとうくとしゐてみそうりもちひて書をうしく
それをと入うもやう一とさひそ蘇のしハ砂今のていつこそて
同うもやうと打ちつく切くわのうくひをいるのしてい作よ書とれ
きわらまつらん血統し　旧 箋 男之
件るあてゝう　旧 ささこハ失し
箋 かわさいなしといつて失ハ　説文云 男中し 師古云 半又書し
詩夜来失　漢武帝賦 惜繁花之未央

其
は
詠の半らくらし
さこゑくらハ末をふうる年し百よ花まの歌乃本全う乃ん乃
一説云さこハ此し中さゝま中此しさゝゑハ此ゑくうし多くく
乃りり乃はをそし万葉十八云おさうつなくつるゝのさよ歌さゝ乃
備しのさこゑくのうこひんすて花も此ゝのをよ中て八一説
あやあ同るしこにをあおさん乃う千し月あくらくんし
乃てあやし
あ乃うさつらいらや　箋　怪し　疑し
ゆくてれ御てとハ　如　尾云の人し
箋　ゆくてハ深宜し　如　花よりみ詞し
あり乃く　如　こをきし
弄　はこらたえへなり
まことなる小侍をくに　は　此詞をつゝの人ハうらとハまらをて
と歌をもとものくりやさたハおんれ古今序小野小町
云ハよなうふ人のてしゆ人よりもうとハうつすしいうはめやうに
一字ておくハまこ此云のとも小まゆをしまてみゝすまこちてとゝう

らうん尺ゑかゝしとハてうし
如　重頭ハ歌をさらの作の道ゑをハ然ゑの歌うかつへきといゝをしよ宮
なをしをさらんへとりう角てし然ハあとしこ乃乃てにハあうひり詠のゑし
箋　よ経れよし古今序離波津浅香山れ歌をよ学ぶ人の始なゑをそ
あらし吹尾上乃さくうちうゝなをくとんてあゝきうかうのちうれき
其　此云のも花の人の乃にようう源氏君の右ハ紫姫君をも桜よたとへ
てようる居すれ此歌ハ更小花の人へすてしうし
一本秘　花れ上の人を云へて
箋　花の人へを云し　箋云源の父の了葉よ求れ乃の乃て
此本云ハ吹する風をゆてハうつし流布し吹尾上も桜なれと
いつらほし深あゝうとみくり　眼とよくへし
いくうく深情くゝり　其　前のふみの詞をとうけくるまう
秘云此本の云ん乃つまう云めてこうしとよるをとくく誤をとなう
嵐吹尾上の歌もいちへきす様もほうしきの様くうり人く歌
をんかうゝろあうれと云へるまやあ歌を同をれとれいうさ歌と歌ゐ　ゆし
かゝ納言の吹れ乃さいうの人あん乃し　は　あらくしし

さもかゝらぬくまくまのさき　　　松　惟光か詞し

いもけなもるかし　　少　惟光ハ小舎店のまこより浦の氏たのに

此行時そと見るゝよし源のならんもこれハ惟光侍ハえと申しきし

つきくしう　　　　松　惟光かくくいひつくるし

つきくしうねをハつまるのなし云まてん申へし　方便　世俗屋

浦の方て　　　　浦の所かつこと

かの浦なるすらうさ　　に　歌書　　峯　御方の人へのまつれ此ハ一字つゞかし

花ハつかれ此出居なるさまれなれかつゝて作ハ歌すにまつせさる事家

みまこまるすうなにとハいてすみるう

くるさそのてまかつ此なん見ますへとまかつきの落れかの流し　一説西鳥浦作出室花近しと

或説ニ翁ともハ云ふと云所まうきのれ李集院　此義不用し　己上

歌書と歌股集とまハとすく経ち只ハその大すらつきれつゝく

としゝまつ物かなるとまうれうし

源氏

須書山あまくとへとおまつねまするとの山れみのうまてするらん

景　本にたつとをたにといひしさ侍そ侍つてよるとゆへきつ　松　篤目

松　うらもとすうハかけまへるまれ新字のしたこよやさつう　篤目

む　さうの新股集をくたといふうまよりて須書山とよもう都し作く

古今れ序の詞とさひけや申うしうなまそうあうらんハかけきへと申うめ

かへのくとさひなしう能てみてさうゝうとうけてきうまとハ云へう

近江

くらさうあうく悔しとめのし山れみのかうまれなうゝや見まゆうゝうへきま

む　これハ今かしくそ及ら是て事う浦ゝれハ神のとめつと山の井れ

のれとのよしゝうてくとそのめくへかしとハいうるしれハのとくむ経

小ちうけきしうてハ詠てくいしやむてきりもそうへ参れかかかくう参照

見ゝうつるりまそて居をなしうらくへきをといひると

栄　本にうれしく悔しくやれにとあされなうしやうけもと早此しまう　将

身うれし新とさへきとハ見てくくしとし或本しくへき浦ゆゆき

義　本寺ハ同かも　　新うらなるうのハ浅うしと見のまやうをまあて屋の不

ころうと見てまするんハいうて小こし

少　出或説本だんちくへきと　よ　表紙ハらくへきとある

惟光もおなし　てゝと　　む　惟光海つまうて居なハいまさと同し

みゝうちとゆりせ於よくうしるかし

このまゝてれのまふ　　　松　お翁云のめれとの詞し

此歌ハこれをきゝてまつひのあはれにハ今ちとさるかたにてとし
かりそなくさむる事も　源ノ句也
花散里の女なやみぬるころにて　ぞ 三月四月の比の哥也　批桜月
まゐりて聞ゆ　是之業文ん
かもはづかしきにひく　源の心なり
内かくて里はかくと　批 源の称し門ハ内裏の桐壺里ハ二条院也
まう来ぬ　批 王氏の哥也　季月
只今くまつりたてまつへ　批 源のかまへひの称し
君ともあさましうかしへと　ぞ これよりさきに源氏君を女の人
気つかしつき哉へ事此詞に見たるか
批 義意より花源氏花散里へ呂通はすし付の緒のかなしひに
こたひめく出あつかひさてたなきまし文と見ゆるにても
いとしきと承りき　是字の句ハかはくいとしきハ於通ふり
なくてちとまて花散里あつかりとりて
なしかるの給なり　批 いよくとひすまさ女のふるし
源氏の心ハ花散里の女御をとかく思はかりなりこそ思ひ里ハ

てありとうあつめ世の中まくれはてて人の心とのこひつさせ給ふ
かくしてそれ寺に入すてらし匠とハ多感なされん心牧ろ事有調
侍りてハ　批 源の心まよひまての筆もなかにまし
かつらの山より中くもそもかりしもまれと
旧 是てめのかつらの山に入る人ハ身もかくしても心まさりん
奥入云 慈して此三のれ心まさしに付かれかつらの山花なま申すれれまきれ
本に云 いまさし勘出す　今案此事ふらせて要のあつくかけかへまんや
かつら山くもしとなかハ身をまてもいかりとかきりもこそすん
今案此歌ハさまさなにかつら山をとくしきさにあつかりれハ友
れ詞にもそろしぬかりまてやかハあつかれ心まかしくりき
西わ中かりかくりかりきとし
第歌 こよひのふくかれの山にや中りるあつさかるやさあめと　立秋の御心云立れ調ととう候る
やすくもぬかつらの山をとぞいうつてまるのまれ者のまくらや
建暦三年三月家立之三首之内　以上箋此分を源で
批 只かきかくすて 夜くとしてくみんなるへし　是白
左々 秋の夜の月のさかし あかしれくられ山もこしね荒かりけり

定家云三百五十首此門建暦三年三月の比小田の札ゆるさむ其中也

は 寛通徳母之変　則天皇后者唐太宗之妾也後為高宗后

光仁后井上内親王通桓武給之由見国史 後任之

源氏 らうとしまつる東宮の御いかなる事ありうちにてまゐりて家の子とも

美 奉るとても実なりつるくよからぬ事の有は此事にまさりなき

まかりしきこし 抄曰

或云見るくしは藤壺を云又奉るは源氏の

此はなのうし可度さゐらん時へ源の君も藤壺につきて御むつ

なうたまやしきこゆるく藤壺にかよはんとすけ給ふかし

しせうりける心も

さはけにいとしくれも　源の御心

女御もさりとふおもひてこそ見んすらむ　抄 さりの字也 藤壺思ひて 源の心を

世の人にもやつらんおそろしさことをあはれ藤壺になしても

孟 源氏の御事に御心まかせて世にもと存しても家男

しやとしいかにしき男とさゐる藤壺は御こさゐる藤壺にゐさ

れ事たるあはれて見世とはぬ一世の人や源へんと家の月

の字さ心さとゐるかしきとしかさうし

抄 録而おりしろうさこさしなき男に有つてやれはいへの心行くきこし

さゐれ藤壺と八此まゝ藤壺の子てく家の男を見てうとしさるあはれ

藤壺と八此まゝ男も臧をんしとし男の臧もうにつけていはゆへそと

いさん此まゝ弘徽の心をおもへきめりてし

或云さゐれ藤壺と八此世の列のをしらし家つとへ藤壺に御心て浅の所

人のとひ行く御かんうを名八ともに浅ましきこし見をとすさんと

おかしうされんゐつきうもしくしけるかし

藤壺はさ心と源の心ひをしてうしけるさいかなるをし

弘徽殿をとしなきとい 抄 女をに申されて事つゝ

行つくゑハいつくうえて かくとしうさのきくへのすみのう

なさ給しおしくもし けつのけ

は あてすもとやさらさ給の事まりて そうハこれとまくてくらんさ

右上東門院の一条院后の旨あつてや家云のし 抄或曰

孟 なさ給ハ相をなくさとらうもていうね紹し上東門院の一条大臣日記れ

或云なさ給ハ後度なりけし此云有て後度ノ所なて中宮なる后なり

御みなともきこいのほらんしいまゐ　後鈔ふ源よりゐかやれし
身のみゑとも宮つ方の御らん势めとなり
らんもまいらせて　源そおもひとみつかれたる給しくおもふ
ぬてみえて藤壺しのふなるへし
みゝるらすて　少御門のけんし宮壷するやと源氏源を
藤原すことかはらしくいとふおかりいかゝりとそひ給さるへし
おもひしく柏木しのふ　源のけし御門のうえし給ふと
源の心中にいそうれる給しくいかやまりてさかうし
如　源のかやうおほえいつかと内ふそらしめへきてされさんおもひ給ふまとし
なんやまりしさて宮さり　宮源しまつて源よ余のへ分
すまとんつまさるすゝ小柏木しなけくかゝりなやうてなりうし
さて宮つきすのへき　宮壷すは急ぎ気色しまつてゐるし
内てたにけ心のまといの御らぬて　かくおかしなけくうに
てや御懐妊なりへし礼をおかしきすといて給すし
れらし　冷門の御みにいおくぬと宮壷のけんすおかりしまなく
んくしさひなけきまなて

二月よなりぬ人は　ふ二月とさる月とあるかもて宮壷
此女御まくとなくかゝりて二月つくりにおそわつてはし四月の
比御んちりひらひくゝさとにまいりくらる内源氏君ちく行き
しらぬしよりは懐妊なりて卯月の比よりは六月は二月半
よ如しさるかるよさる月とあるたもてんはちゝにねしらそてあくは
年の二月十余日よ冷泉院は生れ給ふ十一ケ月まおさまほうや
如　卯月より六月まて三ケ月し　一本　六月とさそさる月と讀も有也
或説三ヶ月ともあり六月とよりて冷泉院十六ケ月まて生れ給ふ
と云説まても不可説のよし十一ケ月まて生れ給ふて
いまゝてそうあらさせぬつさうかるすを　如んくは何とて奏
ちまうぬそとよしんちゝぬんそれよほさなし　箋ふ秘同
家の御わ部くつよいちるうおかしまく　宮つかの人し
松　源氏年なり
御使のとこ此年宮成なとのとして　花
一本は源氏のとこれ年宮成とし　宇治本にもおほえ給り
ろ氏年宮成とふかりて給し欲行本には年と宮成も年の間よ身とま

さて二人の名をハ弁清光のとし定とて弁たるの二人をしるし後にあれ
よの弁かたるゝ也とさる猶ハ弁命婦ハ一人の名なりとの文書に
御乳母は弁命婦とよむへし　私云是又用たり
秘 二人の名し河内本には也ときこゆるよし表紙にハ弁の乳母と読し
一人なりとミゆれ乳母も也とあるし但二人よ読くへき事にや
箋 弁と乳母と読子のうち乳母まてと見ゆれ乳母と読くと河内本に也と
きこえて二人の名とハ表紙に弁の乳母とよむといふへきにこそ有れ
逍遥院云二人に読也とよ
箋云親子おなしひとく乳母弁ゆくハ二人としいふ箋云読むへし
よ乳母ハかはのとし弁子弁の事也と名づくへしむる説あり
くらしにつけはありのへきよあるねハ　私云此説よつきてけうよ乳
母とむもとあれ弁の事二人なりうやくれきこと二人なりて見ゆる事也
親子のあるよしハ読合もとへき様のかなりし絶へたりともかくもいひ合せしよや
内小八御むすめのまゝへり　秘 たゞやうに内よハ奏せるし
そらしくんうしとりかまへて可考し
これ人とさのとしひゝり　秘 皆人とさなりくまたいひなりとし

いとゝあはれ小　御門のけんよはいかく放つかれにそおはれまするし
そうわたうしりとのをおりきとらのありかし　蓬生の人かし
中将の君も　秘 源氏し
さゝてる御前をと見るて　おもうらしまてへいとくしきんと
ほおもひあるハ光源氏王子の親とおもかの人き眺尭その中にゐる
いあるさくとハ左遷のするれ　毛詩文選なとと華墨之
河 奥人ハ源氏の少将の服小将よいそをおもひくよ徒よつせよ宋今よく事合せよし
奥 此する也と像のまて見しゐり　秘月
箋 さゝてとなりとはいうやう秋覆わうき名をとしてハ知りをとし
あはれおかしとさてとしもせのへいたよひなりたかしもりをぬ
秘 源氏の王子の文よりへきとと云箋云此事そ御かたの寒然り
身をと房の表むてくらん河女さん見てと后あひく生れ給ふ宇中
のおもうハ左大臣はつく位を極むへしと勘へ申しし申のおもう須
小女ハいくさきのを見しとるそし事さしてくるかなあかりこと
その中の乳母いめありて　河 これハ源氏の河内本とも人の女子
ハいひまきうりしくゐるやうのるし　河内に遠の事をいひうハ

卅
いとおかし作り花宴ハ勝月のすたる事藤壺のかたにハかとし
秋の花の露ふるはしく 藤は下の花宴ハ勝月
藤の花にし藤つかれあまたにありて 秋も花の露すてさくうらみ
是ハ此事の藤壺つかれ一筆小帖を投ると つゝれ表 此藤の事とふ時よ
さりけれ源氏一世のすし花宴の義ふ明し
河海の抄にちうわつしふに源の詞に他人の詞にいひまさる
ても始りけるとしらむと聞穿鑿の抄しおしなるくハ是をはかりとし
此藤のふきまくる人々まさ様なる 水原抄云若要藤不可借人と
云本又おそきんもとし 今案是ハ源氏のかしはし本又ハ歩ふへきうれ
を
藤の八重南とハ多きう花の藤とそいつひ様の藤って是なりし
ある花の御し慈藤と云ハもうらなるとも外れなりと見る云本
花藤し花藤とふ八両さしき藤し殿る字の待抄と藤と花數
懐藤とも云ハ者要まつきて懐の藤し丁寧なる転とも見分へ云々十六七
みつて云々し河海の説のまとこし ぬるは又原因しにおもふに如し
かてにし源氏君の御藤いつく見すへきんへもなり
このうふれけり 中藤壺懐妊さのうさ源の中よりて四月に

花宴にまうすまかくし藤壺
おもひ打ちせ よものなり
もしつゝけ見りけりしや
十四年 とはよしおかしく ひもなり
七月より参りて後
七月より藤壺は参りのまかで
懐妊四月と云々 弟日
いろゝしく
抄 門にて桜藤ふめし
抄 懐妊のさた なり
あらたに
不 世も例次しくおかしけれとてもし
御めうひとを
抄 松なとなれ見しこれたさにのとしハ藤壺の御かたにて御わかれ
紫 新源の御事
源氏のあまるさまかく也
さのひるれ宿しき
すてきけるく
藤壺の御かた
抄 是上のまへとして
ろれ山寺の人も
紫 是上のうへ思ひあまりし給ひて東の宮の家にかの
花桜の御もさ是上の前相父の家也
京の御をとつ
抄 いと言う見つかれと成すれのみ
おもしさ物しつと

萩盡は古事し侍ることゝ遠慮の御心也

此月はのこあはしふきまさり

は　いせ物かたり　かくつらし為世の御かとかんみこに物ふきまさりたりける

お　撰集　つくよしはかん今いとさむけにそあはしふ国さりぬともひのをまされ

今宵萩つかはれ侍まし

私　川の香月に萩盡のことはうけ為にくるめいさとけれ新古今　箋日

月あかうあらましを萩吉のひかりにおりたうしてむ

を　御為つひ為の御いはんもえは六条東院のみくるしかへし六条院

の　昌みぬるをよいつまでやとわりつるかし

私　六条院中宮兵部卿宮　御は行くらもなるへし

私　くらしていさひきまちあをつゝらも萩つゆの古事あることなれ

なれあはつゝ物いのしたかしかは御ゆきもくし

さくれたいくちむくなる也　新今月のおほしき夜ほひく又

此宮たけまさそれならゆ秋の色さかうへしならかしし

いろうちもをさまるもの　云これは昔のうみのいさくとし

あるゆ内大納言の家にけり　既是の源の申しはを上のみ観えし

物のさまの人

梅壺の御役家皆宮上の御祖母し

私　よろしうあらぬめでしとりくて出み入らばかき帝にて又朝世の

あられのことや　私　源氏の詞なり

わきともかゝる為つく　私　つかふまてわきておもへ給ふこ

いとかさかりこきこゆる　私　おぼ御まかり詞なるへし　箋日

そむつかし事に侍れと　私　いつも、うらしくてはしもなきと

箋　見くらし古のみる卿宗なりけもとし

かくこ宮のやうにとて　箋　院あるのかゝしけるさまし

文　おもひつきまいては若菜の抵抗と為へしと云れ秋のまし

ゆくとむつかしからきおもし所は　笑うちつけはしのそれ

なくめてやなからし　源ももひまりいぬさ内の分れらとし

私　うちつけよつてもそれまての抵抗まりとし

箋云　抱源氏とはあまりに深なる御心は記所のかしちかなると

まさしも　猶云おつるれしくやなれなり

まにう院所を言いふらもひて　私　源の内なりは大井のおおく

箋云　此源の御中にくま秘所が帥もしまるる

私云　女楽の門の前て間たよれいつ　但真ふらうて見え入し

てまふさふまふさいしうさいし
かひなれさゐりけるを
かやませのゐます
昨しやすめし今又重なしてれのまゐらせ
ころうんちそ
こけうつやしさせぬてゐのうしろへて
とく自を切くゐへしぬ
かくまろかれよりひ
弥うひけるころして
いとしちうまれて
見かくやましてとをさしよみ切へし
宗云 源と奥侍く居云ぬ居余ち見
もきこゆるとし
妙ら見籾云よいひ見ゆてそるよ
ころ侍てけなゐ御前
いとうらしけ前さ

如 源氏詞
如 付上のまと同人し給ふぬまし
おふ居る見えつひ宣ふくて京人のゐり
しれをいふ源の御給ゐさらしと
如 くらよりのぬます
宗云 まきてしさせぬこ
如 いてけなれ見ゆるへ業上やゐます
如 接世見さうて分へ移かを業てとし
如 孫る見家居すれいかゝいふ前りを源氏給
松云 給ゝいおのれゆくすまをもあまし
居云見前し
如 いまさ居云の詞し

この君うちに
如 此上し今ちと成人てあくい只と見侍
おのれらしけるをいふつくてやうへきものとし
うこまうとやすし給けるさうてあつかしつく
如 孫のうまりうりとひ給ふうへ見かの年齢すい源人只と
をうそくるをく分かそうつきぬとおりのちへ
めとれほまへおひく　日付詞まて初今
見をしやすし見ゆりや居云見夜西そて源と御しやゆると
ほうあさう　如 源の詞し　居の見やさうて初めし
うりぬ尾う語りとりてろとつけくのまつ詞し
此世のうにそ　宗云 若世より見咏よりし
かれいうしけせう　居見此よ見源のひゐのしらす
まみれてみすなれてのみやとうけくれます
いくや見うけを身し志んね　松 お前云の詞し
文宗云のまつひのまやを見れしけるてやい志つゐそし
おねものこうり　案の寝ゐへつとお前云りといひかなくし
あるさよりくるとをしして　これ宗此よの居見にゐゐ源のやまし

うへしも　にたとへさしていふなとの事なるへし
これなまめかし　山ふかくて見るなとの事なるへし
いさゝかしつは　人まね祭しいたけなるさまし
かしこけにもみえさり　只ひと鹿なれ親ひの多くハ源なれなるへし
かくる心もちもさきそのまへしくかくれあしさて尋ぬと云々
いとたゞしく心きと院へと　秘 源の母宮えし紫の上をいふ也
人くらしきにとうくろまへとうしつゝうつゝあるまさくね神心まし
さんやうなり　られて源の母宮えし紫にて紫の上なとの
しらすかく親ひのうへてくろくれぬまて
ものうひなの紫をひや　秘 源の宮し　唐錦のことく
向こにいたけなれしきなりしよりへそうなる見へし
源氏 まうて此日　源のとつひきの翌日し
帖 いまけなき御代のしきときしよりあしまたかなつしむなそえてむね
姫君の御文を源氏の君は人ハきるのやうにも御しかしてはへる
らうとは乳母をよしめて君へつきしすめハさるれ一事とハ諸もやかし
源へかしうらうるかハ尋にまうける

秘 よろつの人をまねひとつくり給へし　空つきそてハ多けれの一つゝなし
なりもしハ物なしめしえすわねハ不負也し
抄 秋かつらしハ源ノ字也 行末めしえすねえ月ゆかしかりあるへ
かえすかへすねハしくもあるへし
おほかた人の心ハやて　秘 源氏の御身なり　花宴用
河 うちとも入の若紫けよめなりしおほかたを見る人やこひんとを
日吉 源氏もなきの行末　小君ことし御見し人にこひまさらん
か御覧にて君ぞてし給ふ　秘 か御覧の心よりてそへかし
とりもなき給ハ　か御覧も此事し源氏ハ小山へおもむかむ
いとあはれとおほえ　源の詞し
母の文をまして　秘 若紫のゆかりにゆへあり
す 若草の別れと申し物語にて　若 男女にて男ハ源ふ源ふ
若紫 あなたにかきしる女ハ源も源ら紫の上の事を
秘 若紫のゆかりの事　秘云 おほかたくは若紫にしるしての人
われあらしまくらとくらるハ源のなくしみへき へし
あるゝらけすゆくゆくも　秘 むかしのゆかりと云ふ也 若草ハ若紫をいふし

きえんことをおもひなるへし　伊勢の哥の詞也

秘　おもひやりてもおもふねのに事とらんや　きえんこと

なりと云をのこし此の書とふひおもかたかへて

見えさるやらん

こし見をたうやらんとおもてあるやうし　秘　源印をひとふひのよりかよりへ

源氏　事につきていつかとりし此事の様まうひかそのほうへるのいなりかた

つゝかはいてうしして八月とあいなし

河　此の此事の名を此し此書上の名子先達人事ににんならいうを

なるかしにて祝ありなりかにかたりは後世の此中の中へりるとい立そ　紫

此事の一本にものもして此の事にある何かりとなりて見へりると

云この名を此よしも此事に心かりなるへきのなるをいる此に

有るやうもの事の中よりとうるのあるかなる奉ることあるくにて

いとしもの事のあることくるうかの物此事とりと皆一あるの事し

六条内大臣すゐ式此書は又のかなる所しよこの相当として此事へ

相としよし　此物語の門事一の大人かの者にして此事ありたる

有いうれかのう事し　第ノ私已上同

秘　武蔵野の心なるへし　河ノ説誤なるへし　秘云此哥は源の業上

ならむとおもひ出してある様子ひとかきこに源しの事のまくとする

秋の末てうなかなれともあかの事を源しかるかあるかれと前八月

なかりも源氏なかりしかれ又源氏の事の事の孫をとおもひおきるかなし

ころかひろしてとなれハなりさうにおなしくおもふ延喜ての哥と源氏の

カミナツキ

十月まてをはしめの行幸　中　朱雀院ハ嵯峨院也天子脱屣の後

の御在所也　三条朱雀ニ四町ニ落て仙洞なり延喜の帝の比ハ

多くの御門を朱雀院とは申ける十月の行幸ハ紅葉の賀なり

弄　朱雀院行幸ハ紅葉賀巻の行幸し末摘巻模些延也紅葉賀ハ

此巻の中より末摘巻の事ニてたにあるなり　秘同

花宴巻ハ翌十月ニ行幸の事へきまする也とりいふをし実ハ

紅葉賀巻ニ見しかうかほりは連して稽古のための事し

秘　朱雀院ハ代々の仙洞なりけし

まひ人　ま人ひとりとまてまいりようえし

えらんてらるる家の子　弄人々ハ将及殿大臣家以下の子なとり

出ゆくなしよれと源氏は中将あるすて　まひ人ならし

山さと人にて　花の住のよみ出し
私　こゝろちはれもとくれて　音信をかいあかなり
あるまんつかりしゐたり　私　あまともあかりきへまゐせのそうにゆきし
さやんうなしくとえかれもつきまとゆのそし　宮に月のしやうの同
祠と同巻にかくらせ　作り鶏りし　けりの語れ人ともの書には
ゐかりぬるの月の　夫九月のゝし
私　実たり逝去なりにお内言もみへすなりしたいにいそがのはてすれ物とらる
不　丘石九月中旬のほとハ六条京極の夜にて佑り相同ヨリ丸山にて候に
世はんのたらつちすれとて　私　世の中のたのゆし
伊勢に何合ゐて相かし
かゐしこころひかけるにまくらことゝもかはり　伊勢のねすたと源の人なりし
よのたりのこころにさも　源の人なかり
しろかけにこそり　私　此まさねかし
あららやもよかりし　私　相畫ひ更衣にこゝろれからし此の中にを添乳宮
弄　こゝゆきものと見はあるあかしい女房ともよむり又明石中宮もて　戸
我　帳肥にいうりかことをとしあかゝることは長にと思ひあれと見てきりそゆる

一禄さうれゆまうへくらほとこと　私云此は桐壺巻ニ源氏
もろくしうち給と　源氏母更衣よへとうれかのりしハ三歳の時のこと
なれはうゐうたにおそれ給ひてと表源氏と云ひ色そて六歳ニとうひまゐる
おゆ内言女人なりしは　生れ給のとしみまかり人へしとそ経
いろそくときこゆる京の更衣に　私　此上の御人ゝおものかて
少年祖母の縁をかうなり人ゝし給ふは後ハ前の千回の
こけくちのとらかりの来　集此うちの源の移りしゐかし
おそ後しうらんなみの　源の人なかり
迷ひゐけり　私　前にあらし筆れ見よりしかりく
作みさのおとして　私　丘石の作みさ母へとゆひかけり
身にかゝりしまそし　源氏作ゆし
御神も身にもなせん　私　少納言と羽し集の文首守で更衣風空と同伴すとし
これ始若れ　私　此宮の母君も文多くへみゝして継母にていつと
おもひすてくいて丘石乃えひかしし　私　宮の母君は按察卿
又此宮しすもの此方さくゐてそのえひゐあゐかうせみし　よう
此巻の始り伊勢の源へてうり中されしとこのゆき此方にそ

若みや実の少女まておひたちハ紫の上の御元ニは継母し
いともけふらこそかしね　　抄 一向ニ二三言の時なりハ立ふまふ
てまかりてし紫ハらや十ばかりにて御ぬしハ他人の中の住居もいとど
まさなもふくあり　　紫の十ばかりなれハまさ人のなつかしき
こと知らぬみてなれとしけれと中宮の出がよしいろゝ中宮出かんを
あまさまのしわかうす中の　抄 系図 紫の女なとうひ三人あり
そうの中にく一げのあるつゝりきさ人かうへしそれを口抄とし
二人のそさるやき少将の度なれとし　箋云若宮に実ハ女三人あり
冷泉院の女御とし 摺豊大将の少将とハ少将の猶しと一人ハ紫上と
きこえさせ給ひあるも　抄 居る也 ろし
ちかきてこおほく　少将のさるゝ気色すしけれとわかまいらせ給て
しろくろかなせり
うつりしけれぬ　　源の源すし
あけのこゝの重と　　は なかさゝの訓し又そのいかしろし
按の人ゝさるやうひもしきこせん　源の後ハ此ゝなとかゝらへきしゝを
重子のりんしと

御くしはうらとわりくし　けふ上中かうゝなれハ抄と見しくて
いまさ似合ぬ頼しそれはまさかふ年の程ようおそなう御くにかへり御ざる 言
あまかりがう　　抄 源の詞しきのいたけなれハそ家にておさすなれとし
簾 御人つくまって　紫の様体もおもくしてうくしてうとおしかるへし
旧抄新抄 あわれのうちにうらみんいまくもそこ三ハうるすおくれ
あわれなれうらにかわ身ほの気色をおもひやを見るおもふとは
抄 箋云此川言と用かるし
むそ若此葉のまかれふすれ御をおもまかれかうそに御中やまたいは
見ゝ菓子なもそくへてつゝ着曲さるやまとのおそにいゝへきのかて
夫若のまうれまおれ御をゝもひゝうか雨ていらん他んなるを
抄 若此まかれまあやせうう
一すしおもいこゝに降ん法をうつれわるとし　箋曰
安の定家にかけむ源氏の御の結の名所よる此を入ゝさく
あさましうなんと　　色人つくまてやすし法の此ハ此さ海し
かれんとし御門ておかへしかれん同し　抄曰
言にはかいらくしこくれ　少納言の訓し又実かとうけるに除もかくちとらん

清少納言
源氏けふ初冠と行くなり
よる床の内もきえてまろねしたに玉簾なひかん揚てうつき 御簾
を 政事ハ源の大臣も志ってるひきあつかんてハうまたつつけるとし 如月
一旦まろ後よむかうべき玉簾あてたかろう可しとし
ようなれてし 秋 つまさいけふなれとし
若年齢の教の事のやうし
を 末いたけるに絵のうけたまハまうなれれおやけくにくきとし
きこゆうさまれ 少納言が物語なまとくけぬすとやしとし
なそてこし乃らん 仏 人夫乳母いつけた手とくてあそこえらき
あやの関 伊行人ハあそ忘さらんとよ奥入ハこえうえとも理の紙
花なきもをうしいひくすつてよ 奥入ハ末摘とそし
川岸の代なとおしうされの紋へとりうのみくうけしあさて たつ
んハいつさう一うしいさおふゆさきれなし 若菜 川岸前にて思え
秋 若菜ハかたてたひきうんしとのう 秋ハこえきさんとあう奥入にあて
末摘とてゆ川岸のいそしけあと奥入とむかう不審て
多にしこそまうれんくあかくう 源氏の時まよぬくうとし

君を人とこひきてし 秋 君を堂上しら人ハ左上し
住あそひしうれ 堂のあそひゆとれしもし
ゑのたてしまれ 秋 堂の父なうてよし
少納言よ 山がつの初し
ゑしはあし行て 秋 源の羽し
こうてれまよ 秋 うれしくとし
めしうひくらう 堂の人し
世のよにさしうりて 堂の少納言かへしうてし
ひさうし 同 車 緑の名下まうすつぶれ
いまさらに分て 秋 源の初し
されてそそうう 秋 少納言羽侍らんせえまさうしいつひ
なれさ自そて源氏へ申しよう ねい世すれめて
まとさしいまてく 秋 らへまきぬとういてう何へ無も名の
あつひへまと入く髪をさくう にたなくし
当世 見んそくうしわすし
うつくしうあう比事る おひさえの我まゆひや雨く兵又こえらし

なれハくいへる　如 紫のゆかり
うくてまいなしぬ人の　紫の初なり
移すんといふ物のことにて
つきてあくりいへる　末すゑの奥へ入のつまて
源の入りけれはえもいはれぬ人へ入のかたへ
今ハまうり花のえもいはれぬ人なりしとこぬひて　源の初し
そのへきんし句を切くなりとこれのひてて詠歌し
めるらくや　少納言初し
さうしとも かは　如 源の初し
うちをひまく　源のさ白し
そのみ人まて　源の今夜さも宿まりれなくきし
めのしは　如 少納言かたり
うらうきなほいさつき　同 編集 漢語抄 蓬色
紫のあさつきなかりし
うち給さむしあに　鶏頭をく昇るし 赴仙宮るいさくれといへる
ものおもひ給ひきはかりものもよろしのし

らうゑくおかしくて　源のんなり
乱くいうりと　いへしにさうものし　其の上にあしくときせて
ささいくにあやせのつかなり
いさのへよ　源のこ華こ花もゆきかんなる
おかしくいふうしきかくに　如 紫の少年のかくてまとさう
なるハ此人きすかなへきぬをとはりかひさうめくし
てとあかのりや　よのつのれきぬく見きたるとし
いそはれは見たまる　これより源の初し
かくてのもふいてぬおちし此ハさうまりと　いつと詠めて地おち
まうるはそうありと後てしかくて此ハいつおかしらんものとし
此れぬうなそいふてと楽し　如 少納言初し又多我てうち遊集せん
家き御むしへまなとし
その姫のとし
これ御四十九日　花 十一月九日此居の中堂はれうた付ハ
朱雀院の行幸なかりしもまゐらへし
弄 十一月上旬彼行幸八後なかりくし　秘曰

如 源の初し

さのりしきさちらるうし

を 参河守かの源氏父にてハまし由をとらくもてすいせ給ひて

如 くらしくしきハ父かなて見するし家ハ法りしれ之か事にて弄花之（きさし）

芳るれ茶也も品にもそれにて要をいとしろう

芳るう露つる見る詞のさ母ともにおりしろうくし

まてしの身さうと　如 まてしの身ぬしるかいとし

いと思ひくかしひすへ事れらちかなるうるを

を よふ月の雲白き夜思ひしうあようしひまふを見えの人のれ過

夕顔の君の始まこ六条ほとりれに思ひあつきを何まいハ思ひて通ひ

給ひ所と云ふあけひにやし給ふ　但氣見ハ新人まちう

如 行そまかしけるお結れとさうし見るも切れと経なり

或抄は宗祇もかし常るれ里と二条院との在なるとあるとう

れ館隣小り重り　雲也　例のをんひの句と可也し

（源氏）朝わけ芳る門宮れましいまても山ともしつてうとあれ

は 妹之門催る来の　猿丸大夫集云　あひむまる女れ空れまへまし浚

由りて帰のとひともしいまてう出る

いもうか門口らきて　ゆむしてうつ世れとくれあをん日まてに

（八七カ　カト）妹之門　催馬楽　いもうか門ちるうつ門行きつてやうゆしひらうき

れ面りやすらなんちくれ也とさ給ひてうきやうてまいんちその（たなさ）

如 つもう門催る　てしうこきやそなていうあうう打りしに

（をこれのよし）立てる母の芳れまうりのこそハてうれとさうしにさうう方てやし

は 扶撰に女のうたにまうりうたに門をあけさうされさ兼輔卿

秋の夜れ草のそさしれとひしきふあられとなまねたれてまうて

（をし）いうもにつきさをまさる秋の夜れ草のそさしにさうう七夜は

を これ猶もく心にて待りまり給ひぬ草のそさしうれハさうう又また

あらぬものそとちつんて

如 けちうるき草のそさしにあさうるもちそされ也るくハうそ思ひ

けにお侍れうさうれく寄りあ也　今もかしく御給はまハいのよし（としを）

そまましきくとけうとうきいくしきらうまちれあ事りとなさあらし

在人おちしぬ　二重尾　なうへし　如 けちもし

あしううけるへの　花 君見れもし

を よりれうくあつまいう御るいもう他の所ありしくおかり給ゆうくる

私云川守におもしろきなり　私 案上なり
ありやうすなり　私 常ハ接頭ハ多のは
書つきての筆ともいふ様也
かゝりたるてあるしさてうへき詞をかれし
かしこに見えたるしを　私 文字の御かなるし
私もつしもとハ人々源氏の思ふして実ゝかう様と見ゆ
めしなとしあるにつきつゝかく私の人あるし
それよりもこゝまでう　其ちゃみとあさるとハ此中よりう(な)
をまたて付あまてうさる事をまへしく見んまゐりましき
うば乳母まハ　其ろん又ゑの詞し
乳母れありたて　此出しまゝのみかへしき人の業の方に
もあるひとれのまかなり
乳母いきうし可りして　私 つなきくして云へしとし
まう人きあると文字乳母ふひきうせまの方も
其そさうれんへるすと　私 てい(う)れ此業をとひさうますまくまし
ちうりよしいもむ　案と文字のちう付きますし

かのゆうつう言　私 源のゆうつう言し
おうれ作かきゐや　文字乳母の詞し
としう殊もありしをと　私 文字の詞し君の御ために言し徳
あゆうたるまふ此御方へ(や)こゝにしうりと接待しあるし
もとかう少まゐ此御方へそうてしし
あゆうう云しとこうひくしんてんそく　もさ今ていまうゆゑの今
此少方を云し　私云今此少方とひつ方業のよりれ此少方とる
ゆうもしうるすて　さううう連とまう五の少支まみあうし給つてよ
うえきをさやうにてもなくてう随わ孝此傍小方此のうへんい案此為
んうるしと父ゑゐのまで
すゝみかんありうしうも志つもしつうして
つきてとし　私 おだう御あまいいそうきうしうしておさなき人の
己う此たんと文字のゝまつもうけて何かうていまで
むうゐ手ありひまつしもなふうんありくそもとまて接まお御云此児
のとの詞しうく思此かくし此くいい様かのきとう御さちの(し)いまで
私云此詞の私遠ありるい御内本ノ接なり見かるへし
まうひうこひやすし　私 花ゑを志うのまゝうし

ちるなきゝゆるさきうし　是非なく立上りて御内へ入りし

なからさしてまかりし　　　松 父宮ノ詞

何さまの身の上なるらんこと　宮の御気色を窺ひて　立より

いとしうらしう候へて　こよのかくれしくゆかし

君の御ゆくへみよりは　　　松 源の内も出よかし

言はるらへきや　　源の惟光して何つかはされ候ふ詞

さればこそ誰ゆゑの事　源の言葉をつくして御のみを

御つれなさ候ふなり

あらきなるもしらぬる

何かしこのつかひくみ　　　松、少納言申し

も父宮へは源氏の事をかくし　松 父宮はすでにことしは

宮の御事なるや　おもひかくしまいらせ申して後日と云ふを

うしろやすくつかまつれ　少納言なきて御供申し

人目なきやうには　少納言へ言ひしろ申すべくつかまつれ

とゆかしく小つまにて宮の方ならは御ねと源のもとへまいるべし

まへまゐらせしておしれて心かうゆうらしとし

いとうなきけうしけふて　かゝる御事あらんとおもひてみえんは惟

光の宮へまゐりて　やまと連れ行んと一所にうけしきたまひ

なさねしいつひめし　前ノ詞　今宵よりうちに宮へ

あそれもしれしておやせうなるをみとめおもしのうへに

待ておほきやうにはなりあそひまゐらせて出し

ぬらつていらする事よしとんえらく　　大輔ハ惟光とお物云

うきまぬかれは　いかぬのにとれて　おもひて御供申

とゆるしとんぬるべくあふしとゝつし

あらてみさ見かねて　　松 惟光くる　急ぎてし

あされて打わらし面々御出て　忍より源の入て

きり子ましても其のあつて　　松 源より惟光して御詞

ゑあらしたなんに　　　　　　松 少納言より是よりもの申すし

私云是いゝ見て　惟光にして詞あり　惟光を誘いて源氏を宮の辺

とう急ぎせらしとし　とし此のようのまこふあまてら下を

うき御つかまんて　少納言まして御つくろひて宮のもとへ急ぎし

いとゆかしもとしひかりとおもひかねて参らるゝ　惟光源へ語るし

思ひあたまふ
私 源ハ蓬生の方におもひなきなし
まいのみちをしらけて 蓬れ源を思ひしたひてつくられ
あつまりまうてきてかくらうにこ思ひもしつたれぬし
は むかしよりも思ひしにて つくれぬれともいとこそ山へとゝて思ひそこし
思ひあまりとき恩をも 風俗常陸宮 あつまハ和琴の異名なり 又
東調（アヅマシラベ）して 秘曲まてし常陸宮風俗の秘すへき所の手を
東調まてもくはしく ひくへきとそれ世に知まつりたまへれ
む 和琴に菅掻（スガガキ）片掻（カタカキ）搔して 神楽催馬楽用わすすて又掻手
さうふ也之事搔手といふことにあり 又掻手はさきに曲の終に加ふる手をいふ
曰 一種後の人の時てまで明とこそ可知し
私 此頃古来不審し 源中言秘抄ありてはいかにも此ほどに花鳥は海
外度は彼ことしめすに種とも御伝とて ますまことを云ふ有に御行すへく
まろし常陸宮のをとをうれしう思ひ出させしはいかは見まくはしくまつりし
今めかしき蓬生上にいのとをきにて蓬面をものゝむつましきふるきゝなり
うく思しく見ひくくさはく事人のうへなとこそ かゝるハ末摘を
此事人とわきまへおかれ如つくし末摘ハ常陸宮の昔の姫君したまへるも

末摘ハ今まつり此比はふにおもくくしととし
常陸末摘みかはのすゑ時ふにあそこみゆなし道遠なくし以んて此等
とみえてちうくとこと 末摘花すといひくさにふかくこきいろありたりし
ておもひ面白し覧ハ源の和琴はこれこそわれたと常陸ハ此うたとふもあるへし
者のわきまへあらはせて 私 なりて 又言くハかくれつくきしくむかし
あらはれたも 惟光御の者なりとし
はわしうおもてはくみしりたるやむし 源のとて
まさにむしくらさんと 私 又いまいつれもかりしてとし
めならなりをしと 又はなし所のおとをえあをとそもかんさい
なれいかうきねさいにしちれんとゝのあて
ありけるしたにものせん 源の惟光ものゝふ詞し
車れまもくさすらう 蓬 どうつくろうへきまうすと惟光云ふ
見くれたるに侍りのきしるの侍し 私曰
おほせられ尋ねて 作者とてといふ詞し
うけたまはりて見もちぬ これらなかり
思ひていかにせまし 思ひより源のおもとにくめぬし

もてはやしきゝなさるゝ人の行ことに
人の行ことにあやとなる紛らしと六条上ハさまてか行の女なしハ
あやうくにもなくとの給ひて常ぬすかれハおもしろすこれハ年齢の
につけりしうとねたらしきことをひとのりて
うらみのたまふかはすへりんも　六条ハ心もとなし源氏のたまふへり人のゆゑ
よれ源氏のきみ仰事よそ似合ぬ婚姻とてとしたまふりんとし
さてなりつうしてんを　如　かくうつしたてつるし
うやうにおやくさを思まゝのしてたま見へきまゝに世をつりて初ろ
てんとはえをひきうりむなもて鞍源ハいそかれたるとにあるし
女君をといのきなかくよ　如　葵上し
うこたにいてゆらう　源の葵上へのかたの詞し
わか御まかりて　少ま　葵上の方またも源の使はいへたまふこと
門もむなしくも　紫のたちひとつにあはせ門なり
兵部卿の宮にも　こふれはこれをし
こゝにおいてもまうけひとし　如　源の心はのかりへと怖気かなし
おさなきひと　如　少納言より詞

ゆめにいてとおもふかなう　如　いろくならぬなかに御まへかへしとて少納言ハこそし
露へらこうしや　如　源の詞し
胸すにこ　如　少納言詞し
君かうおさなきを　如　源氏うらく入ます也し
いとゆゆしう　如　みなうしろきとて少納言をよひよせし
ありた人ぞし　そのようなたう人なとかして
まことにおさな紫の君たらしふ　いまはた御目にもおしはかりて
と源のかへすし
うち紛類をとなりて　尋　いまさらふうき思ひとるかやうやうとにと
如　いまさら年月なれてとめけはつらおもしろう　やうき
やゝまえきこえん　あくかれ人のゆくをえみすましし
文なん御もちんふ　如　文ことねつとたひのなし
御くしうにつき始ハ　源のうくしく絵也し
こやの古ひうのかく　紫の杼おもひ出しくかく髪なとつ
ろいなりをまて文こひとたるかしゆうかと源の文わハつらかれなかりて
父ゆ文はあられとおまされまへるし

まさぬ同し人をさそて　文字のちかうハ係てあらし既合そ
いれさもセまっし
たゆみ少納言　弁　負ゆの女房なり大輔なれ於の一様なり
紫上なれ右つるつ人なり　宰相大輔ハ惟光か少納言ハ紫式部とし
私云少納言と惟光と云つる筆不審なれまそかすみそ伝分
よられるかつもし此事しく惟光ちかうかくられ惟光なれかき
けんみすもいらとおもゆ　又紫斎のかれ人のかゝす若紫巻
負いてとるて紫上なれ女房とさるせるらハ負いふ少納言二人
ならう女房の名なりそしさて大輔か御為しと云光なとみ
まらしかうく光ある大輔といふうとて惟光まてあへきてハ必
うにさ河のふし　係の絹
わさうちくるなれと　文字のすへまうぬをみてをゆすかて
ましてやすしりさうくき　うく人の随し事うかうきにますて
文字なれすと一まさう給つ音信十ちうさかう人まれいてとし
合よう　これまくもて人たけ仕ふ事れにまとれののて
かおもそうまくし　少納言同し
文のもくらセ　名人てらぬくらら宮の方おかうらハいてゆさんとおとらるて
よしのちふてもん人ハ事うあん　紫　係れ詞し
女房人のちうハ経ちさるうらして事もしてひとそていてく為って
御そそとてもいひき御もとく　ね　悦とツサケテ
紫　むきさけくさかすてようりうしてろして
二条院きちうまれと　紫　二条院ハ法興院を惟ちかし
同し京極のとをうまれさちふなし給ひさハ頼をうるへ
様ひと妻れ人ちし御ろしと　少納言なれ車のうちよりふ詞し
そはんなすると　紫　それハ人てとなり　に白
係の詞し車しりとんまて御はん七四郎し御はんおついそてせんとの語
うそそんとあくハ　紫　少納言ハ詞つハうまてとし
みちうにあさもし　少納言たし
文字れおかしれのすさん　紫　文字のし
負れのしきん人なり　紫　母女紀母かまたやとされ様なとし
酒まんと句うねとゆしとえひまく紹介しめそう
紫　今まそのきうしめてみつく家てしみを懐思しりまうし

御(ミ)丁(テウ)屏風なとはくらく　如　こくらくハ両字共ニ濁て
よむへしいやとも よくらくいとうるはしきをよくらくにまなひてよむて
をかしくきこえ侍らぬものにて候此は心へき事也濁てよむへし
花の香めつらしき文字ある事　如　花香おもしろくハ両の字清
見にまうせとかきめつ由おもしろくとハそこしくと云みちかし
或説おもしろくとはそこしくと云へ分入して同事ニハ面白く
見てよせかつてきくきこへ字なし此文字ハやさしき字也
私云おもしろくきこてまうせまうさとも也
おもしろきハ川つくろふてもやう也
をもしろきなとあるとはいふきのかいうりたるとも
如　二字共ニ清て人のもとめに応するとよみて
此付義いくたひ御下屏風なともこれ濁て
らしら人くあまとハ口にさらりてはつろかならもなく
見るいてもしくけてらう　此上清のことに濁てよむへし
むつかしくきこひなうなき也　也
花文いとまうし　むつかしきハ此字を雅字なれはよみてはよむ節

いまはさハ　清の今まてハ初夜と後夜とをいはむ
後のこはらちもうちれを　少初夜の口ありつくし
明ぬまに　いまさ夜清らめしと見てむけら
相ら見つくりさ也　は夜の字と相く濁し夜の字とを濁る也
春さておもしろ濁らくるしき文字ハ濁る也
人のともられらし夜なと云人なとにとなへしうつわ御伝まてもなくね
おもしろとある文字は御伝まてあるかたへしもいへり
女房ありのくひめてとれと　ありみへき経法讃なと伴し
女房あさてさうつハさらうちり　あしは女房なとのかすきにある
蓮華ハ清くしかるへしあり
日くるまうる経あきよむへく　如　あちの人とかき毎をとし
まう人まへし　清あり　菩うをてなとい
タつけくとそ　只と黒き筆の事ハ両の墨しふるいと墨
見いてりよらの人
清也清のことてかくへし
四人(ヨタリ)まいつりよまり　これをいまさ経のよかくへし

君を帝にも　思のいまさらにはゝつかし
かんかくなき　こしより源の君にいとゞ心よりなる狗し
すぐれたる人　なさけなきものゝやうにおもんやはなれ給はむ上に
色ことのそこにはなきにいひかくしたまふへし
女をのやうかるなん　同　瑞巖如天后大慈心柔輭ゝノ花巖
陽體剛強自在陰柔順從陽
花 源英明　男女婚姻云至剛者男至柔者女　在文粋
如 花鳥ニ　源英明男女婚姻賦とかゝり作者英明ハ也江相公
あるまし　後漢書列傳七十四　曹世叔傳陽以剛爲德
陰ハ以柔爲用男ハ以彊爲貴女ハ以弱爲美故鄙諺有生男
如狼猶恐其尫生女如鼠猶恐其彪
御かたにハさしそへられてもくるしからぬにもこそ
こゝろのうちをしおもふ心のうちなり
おもき後あるひもの心　後やかてあるひものし
やうくおもておもひ給へのこゝろやすきか
は鈍色　其上の祖母の服をおもふゆへ　一説見給ふにこそ

よしつゝしむ大かたは紅し祖母の服中なれとさし出てまいる給はゝ
なれハ紅をきるへき例なし　今業行は紅しの葉加へにて祖
の服三ヶ月ときれと御より二年を上の孫の鐘にて祖の例のまゝと
きこゆる事なりてかくなるなるとは紅の色にて思のことはりなるへき
なるこの御やうハ濃きうす色女ハ紀　但今の祖母の服さ色にてあるへき
ハ此の紀式部をとかゝらんにて　おもふに色のこと給ふ源
を　御もく　あさきおきさおもふ　祖の服そもつきりの給はんとおもふと
なれはのおもてにみえん　紀しふかきは　鈍色の服にてさ二ヶ月の祖母
色ハかひもの色をしるしとも　まいらすとらへ　又いかなる服をもの
さるまい色にはかなるに例のあるへきにあらぬ色の服ハまいる文化にて　紀にて
如 花鳥ノ説も御心へしかひのあそ見へきなり
からる心こそ　其上こし
まれもなうなれたまへる　源氏家のことし
ゑのうへにいくつ給へるに　立おく　如 源の色の高き家源
かうへにかくしのかはりたにて其上の庭かくしてんのゝみかたなり
同　花なりせとくハ紀をせそしたこの紀かくれてとこ
四位の位に一つまかりせし

いづれまさると名れくあらしかとてこくおもふ面白くもらし

私云 川寄三首アリ 思ふを

しくのしや　臣五ハ引とも思ひはずや誰も心に思ふむとも川

君ハ二月三日内へて参りまうく　源の参内も志まいれ思ひとか

つけのをくし

やうてかんかしお月をまつや　秘 伊勢年にゆとし

思ひし思ひていつてうらくくれ也　秘 荻薫の花ゆりとし

同 志う孫うもしさし聊とも以ハうこうれぬとしやさしていは宗のゆへ

川寄同思云

源 そうて見んの顔へり　源のうき まくへくと宗の見ますて

孫なこそのてけれとそ云うふ世きし聊もあらうか ならけいりと

同 孫ハこのくく八若の宿を寝る也ふよかをし業平中将妹ニ対

志くよかる宗しうつつつし孫しけまこそうか宗を人告へ

むまうんてくきしを云ふ此孫しけ根を寝ふ心とへるし

秘 若の根へと寝かけかるたにしも心ういまさむむ此の孫ハなうれ先とも

私云 宗かうまうつうハ荻つ宿の事かりくし

秘 源のこと案し

いくま思ひも

まさしようをと　秘 此事のこと案し

うらほくまてうて　源かり

よう孫てもしけふうねうとて日孫きれ

をしさらうしていらそまこしむるもうへなれとし　人の妹を孫ら朝の妻

弄 此朝人しうし妹くと教へへるり肝要しこし

人かくうるやしと　源氏まれして万葉よえひますて

左注 うらへきゆへと志う孫しおかうくいうたす宗のゆうりかうわん

同 古今集 うらけ向さゆへも名もわに武蔵野の草は宗もそはかうさゆん

秘 人いはすみつこうらうもう御へきれと志うぬとし

はのゆうりし去るすをもさしに志うぬめそとし　川寄哉同此事

まめ男にもしさし聊といくうこうれめてそくそうてよあうすし

あれなるうり　私云 宗のまか孫かれよ似くうう

はまめうしきくあかん　臣五の又に似くかしふうめうきまれ

あうらいつうれ只あひされこえくなりうめへきくまさしハ源のかく室とも

色ともほくう　臣思し　ひらうの色し

おほひのまたいとこし　前妻のむすめとかく尼君なし
のちのちなりし人なり　如 先より君のむすめ
ときこえつるつく　これてきめなり
若しやうなくかく　人ふくとの御すめて源氏宮にあし
少納言もわかれてなけれ　少納言も源のおかたてつくに
のこれはしまてえつすなりけれはし
みくかくしまうて　少納言のいふことともなくてまう
まうくとまうまうたく人々くのいつし
尼君　尼君も継母にあはせんするをとうくらしとそう
姫君のためのしかうて見たまうておかれそし
さしまいくしまうのまうせのあはりおはりたことさんと
右大臣のせれおあいうとるを切へきれさておいうたまて
さんをえんあしといひとてしんかへしさして　まう
人々せのあはりておいうはえやうなると云んて何ちく
わてしあるせんさうふいてもまてむきてはいふてうて
うてしまうて　なりへし

えんあしとは　白 えんあしとはたちりあはれし
無礼のくまをおもれ　無役
たやうなんし　放埒　たまう無うしとよむへし
いてうにかなとしふんれ
おもしうりしたまう　又ある源氏にも云すゆえへし
さこのまな母
如 此宮の継母なり
きく思くと　此宮の宰母れすなり
思ちくん人あり　如 これらの又云にも宰相のむすめ
此宮上のおとりとも思ひしん人之宰相へあるし
源あさひのうて紀あんまらの人　あたにかくしたあらひの
紀ありとも思ひて袖をめてたにりへえてすなくえて
思をおもしこ君のおりもれなくして　此宮の源のおもひとも
ゆうなるたんなりてて尼君れまてとこあまりしおあなんて
如 又云すてかし
宮をはてしに
孫のおやをと　如 源なり
そのよりおなんれまは　おまうおなんれそかし

さうしらつみあり　む昔よりハ船寄れハまことなんでも

女すゝ源氏の君をはじめひかるゝ君のやうにしほかすといふて

業平のいまさはんくるしくましてあき　やまさうさうさんハ嫉妬する事

式部どのより世上の文字のすとをまち業平朝臣世有れ

人のまねあるゆゑにけしからぬいひしまするとあるへし

まゆにあまたは文見れもあまたの事いふて罪ハ人ゆゑでうかうこ

りにゆふく花情のかりなりますと歌道そうし給ふ上ハ（君イ）何ん

りのくてよきあそひものと源の物語なり

みさうし活んとなるまし　ひさうしなくしてはゆやくもろ

しまよりハこれハおのしろしくし

むとあなたとかく　女いむまとあなたよりハまくらしきとし

式部殿に文字先のにさら源と云情を川ほりてとく

これハいつと　其名れやうけてあらん文字にてあらん

されもとさへ女うそらう人のことハいふ事し